

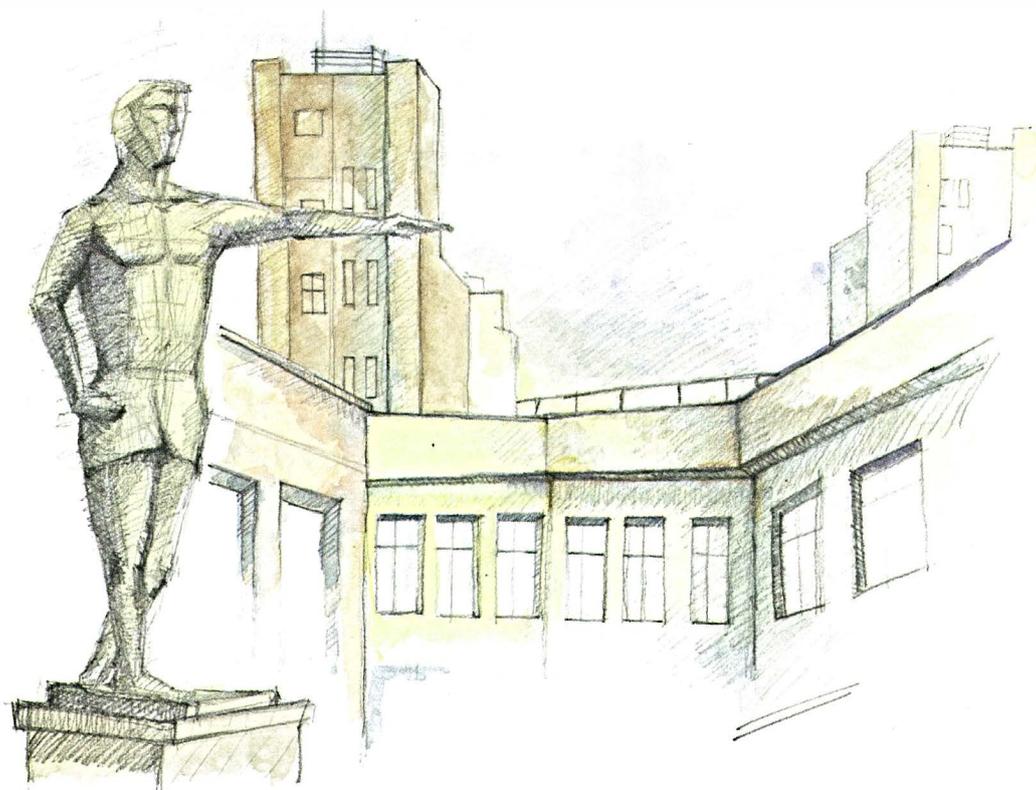
学園ニュース

富山大学

NO. 55

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 62 年 3 月 14 日



学内風景(その20) 工学部前庭の「雄気」ブロンズ像 船木 英明

~~~~~ 目 次 ~~~~~

|                         |                         |    |
|-------------------------|-------------------------|----|
| 卒業生へのはなむけの言葉 .....      | 各学部長及び経営短期大学部主事 .....   | 2  |
| 停年退職者のあいさつ .....        |                         | 8  |
| 新任教官紹介及びあいさつ .....      |                         | 18 |
| パキスタンの発掘で知り合ったチャーリー君 .. | 人部学部教授 小谷 仲男 .....      | 19 |
| アフリカのビール .....          | 教育学部教授 田中 晋 .....       | 20 |
| ライン河のほとり .....          | 工学部助教授 松木 賢司 .....      | 21 |
| 中国よもやま話 .....           | 工学部助教授 米田 政明 .....      | 22 |
| 四ヶ月の日本(富山)体験 .....      | 外国人留学生(経済学部) 鄭 歓力 ..... | 24 |
| 昭和 61 年度公開講座を終えて .....  | 公開講座委員会委員長 吉田 順作 .....  | 25 |
| 構内駐車許可証について .....       |                         | 26 |
| 学部・学生部だより .....         |                         | 26 |

# 卒業生の諸君へ

人文学部長 楠 瀬 勝

卒業生諸君、大学4年間の研鑽の功あって、卒業の日を迎え、大いにその喜びをかみしめるとともに、これからの門出に新たな希望と決意をもやしていることと察します。ここに諸君に対して衷心より祝福を申し上げ、また今後の活躍を願うものであります。

人文学部卒業生の場合、さらに進学して学業を続ける人もありますが、大多数の諸君は教職をはじめ、多種多様な職業に従事することに決定しております。ところでそれらの職場においては、大学で学んだ知識や経験が直接的に役立つことは少ないかもしれません。最近では職場を選ぶに当って、大学での専攻とは全然関係ないところにするものが増えてきています。また一方、各職場側でも職員採用に当って、必ずしも大学での専攻にはこだわらなくなっています。むしろ多様化社会にあって、個々の職場にはそれぞれ独自の運営方針なり形態なりがあって、それに沿った人材を自ら養成しようとするところが増えてきています。もとよりこうした現実に対して諸君がこれにこたえる道は、初心に帰ってそれぞれ新たな職務に誠意と情熱をもって、懸命の努力を傾けるよりしかないと考えます。しかしそれにしても大学4年間に学んだこと、ことに2年半の専門課程で研修をつんだところが、全く無意味なものであったのでしょうか。決してそうではないと考えます。

人文学部の各専門分野は、それぞれ独立の学問であ

って、研究の対象も方法も独自のものです。諸君はそのいずれかについて学んできたわけですが、僅か2年半の専門教育では極く初歩的なことしか学びえなかったかもしれません。しかしそのなかで、それぞれの専門における特有の思考の方法と能力を身につけたと考ええます。20才代のはじめに身につけたその思考方法なり能力は一つの習性となって、今後、ときには無意識的に様々な場において大きな役割を果たすことになるでしょう。そしてこの思考方法と能力こそ諸君のこれからの活動の原動力となることは間違いありません。その意味で、これからどのような分野に進もうとも、自己の専攻した学問に対し関心を向けて、一層その思考方法と能力をたかめるよう努めてほしいと思います。

人文科学の諸分野は前述のようにそれぞれ独立の学問ですが、しかし基底において共通するものがあり、とくに最も重要な点は人間性の追求であると考えます。現代の社会では、科学技術の高度化が急速に進展するなかで、ともすれば人間の人格を否定し、さらには人々の危機的状況をも脅やかす怖ささえあります。このような現在の危機的状況にあって、人間性の追求を究極の目的とする人文科学は重要な役割を荷っており、またこれを学んだものの責務は極めて大きいといわざるをえません。このよう意味で、今後、諸君はどのような場にあってもその自覚を堅持し活躍されることを切に願うものであります。

## 教育学部卒業生に贈る言葉

教育学部長 野 村 昇

学部卒業、並びに専攻科修了の皆さん。この度、諸君の永年に亘る研鑽の甲斐あって、目出度く卒業並びに修了の日を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。そして同時に、諸君を今日まで育て導かれた方々に対して敬意と感謝の念を捧げます。

諸君は幼・小・中・高の学校教育を経て、教職を志して富山大学教育学部に入学し、教育学等の学習・研究を重ね、勉学に励んでこられました。この十数年間を充実して送ることのできた背景には、実に多くの方

々の温かい御援助と御指導があったわけで、諸君は、今、受けた恩義を想起されていることでしょう。

大学では、教養部で基礎素養を修めた後、学部で教職科目や専門諸科学の学習に励まれました。その間、諸君は幾度かの困難に出遭うとともに、数多くの疑問を抱いたことと思います。学問の目標とする真理の探究も、芸術での美の追求も、或いは善の考究も、それぞれは独自性と至上性をもつにも拘らず、残念にも直ちに生活上の満足をもたらす実体とは成りにくいとい

う思いがなかったでしょうか。たとえば、「科学者は自らの欲するままに真理を探究すればよく、客観的な真理の究明が科学であるといわれる。しかし、いま人類にとってサイエンス（科学）と人間の関係が厳しく問われている」（福井謙一）と指摘されたように、真・美・善は人間において統合されねばなりません。このことは既に久しく強調されてきたのですが理解しない人も多いのです。教育の場においてこれは重大であります。

学部における受講、実験・実技、合宿研修等に励んだ中でも、殊に教育実習での体験は、児童・生徒への専心的努力をされた当の諸君にとっては、その努力・労苦の大きかっただけに深い感慨となっているでしょう。殊に若い間は広いもの見方ができないために、兎角不首尾の責任を過度に自己に求めて苦悩し、または逆に責任を他になすって、折角の反省による成長の機会を逸しがちですが、これからは絶えず視野を広げる努力が必要です。

御承知の通り、今日は極めて多くの方々から厳しい批判を教育と教職に関して頂いており、一般の教育への関心と期待も高まっています。教育に携わる者の責任の重さを痛感しているところでもあります。

多くの多様な意見の中から、虚心坦懐に、有用の示唆・教訓を受けとめることは必ずしも容易ではありません。だからこそ主体的に問題を把握し解決する意欲・ポテンシャルが必要と思います。このような自己実現の欲求は、常日頃からの努力による基礎素養と深い思慮に支えられて現われるのでありましょう。

鉄は熱いうちに打て、人間は若いうちに鍛えろと聞いてきました。今では人生八十年とのことで、生涯学習の大切さが主張されてもいます。この何れもが正当だと思います。諸君は大学卒業を以って人生の大きな歩みの始業とされ、可能性を更に、大いに広げること努めて頂きたいと希望します。

人間成長の過程をみると、母胎内で人類までの発達史の30億年分をなぞり、誕生後の1年間でHomo erectus(原人)までの20万年位をなぞり、H. sapiens(旧人, 10数万年前)から、H. sapiens sapiens(新人, 2~3万年前)へと手を使い、脳が発達し言葉を

使うまでに数年間で発達します。そしてこの間に、発生的あるいは本能的な起源をもつ幾つかの基本的欲求に動機づけられて、その後の人生での自己実現がなされるといいます。現在の子供の生育環境は彼等の自己実現に有効に働いていないといわれます。成人社会の長足の進歩と変容は、H. faber(工作人間)、H. economics(経済人間)としての追求による進んだ科学技術と豊かな経済によるものであり、食糧不足や医療の質と量など多くの根本的な解決に極めて有益に働いてきました。そして、教育と文化の進展及びこれに伴う精神生活の向上の観点も検討されて幾多の実質の効果も挙げられてきたことは率直に認めなければなりません。それにも拘らず、自然破壊と汚染を初めとする心の荒廃とか新たな不均衡、回復の危ぶまれるマイナス面も幾つか指摘されてまいりました。

かけがえのない宇宙船地球号には、H. economics, H. movence(移動人間)という特性に加えて、H. patience(苦悩人間)、H. ludence(遊戯人間)の特性や、殊にH. educandus(教育さるべき人間)という特性を重視した、真の人間(H. sapience sapince)による思慮深い操縦が必要でしょう。

現在、宇宙に向かう宇宙科学と素粒子を追求する理論・実験物理学の何れもが高エネルギーや宇宙の生成と構造を明らかにしつつあり、他方で遺伝子操作等でガンウイルス等への対策が探られていることは、人間の将来に期待と生き甲斐を与えるでしょう。然し他の面で物依存、利便追求による心の荒廃によって宇宙船地球号は内憂を抱き、その傾きと動揺が益々激しくなっているようにさえ見えます。

この内憂や動揺は人文・社会・自然の諸科学と技術、そして芸術・文化のあらゆる方面における人間の地球上での慎しみある生き方にまつ以外に収拾策が無いと思います。

成人、殊に先進諸国で、とりわけ児童・生徒の生長・発達に直接の責任を持つ者に対して、倫理性と有能さが要求されていると言えましょう。諸君と共に児童・生徒の将来を明るくものとしたいと希うものです。

どうか健康で、広い視野、多面的な見方、より本質的な思慮をもって努めて下さい。諸君に幸あれ。

# 先人の言を借りて

経済学部長 武 暢 夫

例によって、卒業生諸君に送る挨拶の一文を書けということであるが、このところ物理的・精神的に余裕のない生活を送っているのだから、なかなかよい文句も浮んでこない。挨拶であれ何であれ、日頃の生活が大事だということを再確認した。これも一つの教訓であろうが、さらに悪いことには、締切日を遅目にまちがえていたので、原稿の催促にきた編集委員が恐い顔をして帰っていった。やむなく、今回は先人の言を借りて、ひとまず切り抜けることにしよう。

人の禪で相撲を取ろうというわけで、いささか横着なようだが、月並な言葉の羅列に終るよりは意味があると思うので、必ずしも卒業生諸君を軽んじることにはならないだろう。また、こういうやり方はこっそりとやられていることも多いのであり、ここではその仕掛を明らかにしておくだけのことである。

さて、毎年、卒業の時期になると、全国の有名大学の総長・学長の卒業生に送る祝辞が新聞、テレビ等に紹介されるのが通例となっている。いずれも格調高い、立派なスピーチで、さすがはと感心させられるのであるが、特に印象に残っているのは「ただ酒飲むな」という言葉である。これは秀逸である。単純明快で、下手なコメントは不要というものだが、あえて蛇足を付したい。

この言葉は簡単のようにみえて、実行するのは必ずしも容易ではない。私は酒の飲み方等を説ける柄ではないが、ちょっと考えても、酒を飲むことは人間社会のさまざまな問題が複雑・微妙に関わり合っているのであり、一考を要する問題であることはたしかであろう。自分の財布と健康の許す範囲内でほどほどに飲んでいれば、余り問題はないのだが、実際にはそうもいかないだろう。たしかに、見境なく饗応を受けてはばからないという振舞は醜いばかりでなく、危険でもある。「ただ酒」が、ただ「酒」だけにとどまらず、黒いピーナッツ等に手を出して、取り返しのつかない罅目に陥るおそれもある。だからといって、無暗に態度を硬くして、酒席という酒席をことごとく拒否することでは、人間関係を損ね、仕事に差障りを来すことにもなりかねない。つまり、余りぎくしゃくすることもなく、また、大きく道を外れることもないように、うまく酒とつき合っていかなければならないという

ことになる。そして、そのためにはいつも細心の注意と強い自制心が必要であろう。

こんな話は酒を飲まない人には関係のないことと思われるかもしれない。しかし、「ただ酒飲むな」の戒めは単に酒だけの問題ではなく、日本の社会では万事に酒のからむことが多いので、酒に託して、利益誘導の策動に乗じられないように注意しておこうというのがこの言葉の真意であろう。

酒を飲まない人がみな道徳的であり、欠点が少なく、過ちを犯しにくい人であるという保証はない。そういう人には敵は別の手で改めてくるであろうから、決して安心はできないのだということをつけ加えておきたい。

もう一つ、印象に残っている言葉に「やせたソクラテスになろうとも、肥った豚になるな」というのがあった。一般にはこちらの方が有名かもしれない。やや高踏的であり、大哲学者と豚の取り合わせはいかにも珍妙であるが、名文句といってもよい。しかし、文字通りに受け取ると、これは途方もない要求である。ソクラテスが本当にやせていたかどうかは知らないが、いかにエリートぞろいだからといって、誰もがソクラテスのような人物になれるわけもなく、自らの理念に旬じて死ぬなどというようなことを要求するのは無理な話である。真似できるのは、かのクサンチッペのような猛女を妻として責め立てられるか、あるいは、そのような妻となって、夫を叱咤するかぐらいのことであろう。もっとも、これは独身であることが前提である。また、クサンチッペがいわれるほどの悪妻ではなかったという説もあるが、彼女を悪妻と非難するか、良妻と評価するかは好みの問題かもしれない。

「豚になるな」というのは貧欲を排し、権力・権威に迎合せず、俗論に屈しないようにというのがその趣旨であろう。しかし、豚は人間の都合で肥らされ、人間の用に供されているのだから、ここに引合いに出されるのは豚が可哀そうであろう。実際、野性の豚は大いに精悍、不屈の動物なのである。ただ、肥満は健康によくないし、最近では昇進の妨げになるという話もあるので、飼育された豚のように肥り過ぎないように、健康管理に気をつけるのはよいことであろう。

少し茶化し過ぎたようだが、この教えを与えられた

先人も現代社会に生きていく難しさは十分に承知されているのであり、ともすれば安易に流れやすい人間の弱さに留意して、若いときの理想を忘れないよう要望されたのであろう。そして、一番目の教えはやや下世話な表現ながら、人間の弱さから身を誤ることのないよう、処世の戒めを説いたものといってよい。やや強引に結論づけるならば、これらの教えは、結局のとこ

ろ、同じことを伝えるものということになろう。もはや一昔、二昔以上も前の話ではあるが、これらの教えは今でも十分に推奨するに値するものと思うので、改めて紹介し、注意を喚起した次第である。

ともあれ、卒業諸君のたゆみなき健闘を期待してやまない。

## 卒業生におくる

理学部長 中川正之

皆さん、ご卒業おめでとう。長い学生生活を振り返ってさまざまな感慨をもたれると同時に、未知の社会に対する不安と期待が心中に交錯していることでしょう。いま、新たな決意を抱いて勇躍社会へ出発される皆さんを心から祝福いたします。

扱て、皆さんはこれから社会に入ると生活のあらゆる場面で多種多様なそして複雑な人間関係の中で生きてゆかねばなりません。学生時代に予想しなかったことに遭遇して驚き、或時は戸惑うことが、又或時は嬉しいことが多々あると思います。それはすべて人との係り合いから生ずると思います。この人との係り合いについて今2つのことを取上げてみます。

### 協調性と主体性

社会では種々雑多な経歴をもつ人、異質な物の考え方、価値感、主義・主張の人と接触し、時には協力しなければなりません。このとき人と人との関係を大切にし協調性をもつことが基本的に必要な心構えだと思えます。他人の意見を無分別に排斥することなく充分耳を傾け他人の立場に立って物を考えると同時に、しっかりした主体性をもって判断し評価することが重要と思えます。

他方自ら多数の中に埋没同化しては自分も自分の属する社会も進歩はありません。少数意見であっても堂々と自説を主張する勇気をもつことが必要です。社会の進歩は多くの場合少数意見から生れるのであり、独創的発想や意見は初めは突飛な考として受取られます。勿論充分な研究の蓄積や検討の裏づけがなければならず、単なる思いつきでは実りがありません。

### 出合と節目

皆さんは今卒業・就職という大きい節目を迎え、これからの人生を如何に生きべきかを心新たに考えておられると思います。長い人生にはこのような予

め定められた節目ばかりでなく、偶然の人との出合によって起る節目があります。皆さんが今の専門を学ぶようになったのは勿論その専門が好きで得意だからでしょうが、これをただせば先生や先輩・友人等の一言が契機となってこの道に進み一生の仕事となった人も多いと思います。親しき好き友人も作ろうとして作れるものではなく偶然の出合によって結ばれます。人との出合が動機となって一生の方向が定まったり、主義・主張が変り、人生観が変る等人生にとって決定的な変化の節目が生れることもあります。一見平凡な日常生活の中に多くの節目となる出合があります。素晴らしい人生の節目を生むような、或は、それ程でなくとも自己の改善の引金となるような節目は逸することのないようにしたいものです。

柔軟な頭脳、既成概念にとらわれない自由な物の考え方、そしてそこから生れるであろう斬新なアイデア、ひいては創造性は若者に与えられた特権です。社会は皆さんのもつ大きな可能性に期待しています。

今産業界は経済摩擦による不況や急速な技術革新の嵐の中で生き残りをかけて鎬を削っています。種々の新素材、バイオテクノロジー等所謂先端技術の分野では最も基礎的な学問の上に成り立っています。今こそ諸君のような基礎科学を修めた者を必要としています。諸君には前途洋々たるものがあると同時に社会の期待に応える責任があります。夫々の職場でプロとして身を立てるからには徹底的な勉強をする必要があります。そうすることによって仕事に大きな興味を覚え、人生にも大きな生甲斐を感じることができましょう。

御健闘を祈ります。

## 卒業生の皆さんへ

工学部長 位 崎 敏 男

工学部、工学研究科を卒業並びに修了される皆さんまことにお目出とうございます。長い学校生活を無事終えられて、いよいよ希望と期待に燃えて実社会に巣立っていかれる皆さんをみていますと、私のような人生の斜陽をむかえた者にも、何か武者ぶるいにも似た胸の高鳴りを覚えてなりません。新しい門出を迎えられた若い前途ある皆さんの、今後のご多幸とご発展を心から願って止みません。

今の皆さんがそうであるように、長い人生には必ずいくつかの節目というものがあります。そして、そうした大きな人生の転機を迎えるにあたっては、矢張りそれなりの心構え、初心というものがなければならぬと私は常々思っております。しからば初心とは何でしょうか。一口で申せば、それは人生や仕事に対する皆さんの夢であり志であると言えるかと思えます。大へん月並な言い方ではありますが、人生に挫折と失意はつきものであります。またそれが、皆さんがこれから経験される社会生活の現実でもありますが、たゞここで問題は、そうした失意の中にあえなく埋没してしまうのか、あるいはそれを乗り越えて新しい飛躍を目指すのかという事で、そこが人生の岐路といえるでしょう。またそうした岐路に立った皆さんを支へ、新しい飛躍を生みだす駆動力となるものは一体何でしょうか。甚だ短絡的に過ぎるかもしれませんが、それは皆さんの

初心であり志であると思えます。これから社会に出られる皆さんに、困難に挑戦する気力と活力と、そしてそれを交へる大きな志を是非期待したいものと思えます。

本年の干支はご承知のように丁卯であります。この干支の年は、これまで歴史上の大きな節目となった波乱の年にあたっておるようであります。そうした目で昨今の世情をみますと、まさに丁卯にふさわしく政治も経済も社会もまことに波乱含みで、厳しいということ以上に時代が大きく動いて、新しい展開をみせる気配がひしひしと感ぜられて、まことに前途多難を思わせる状況であります。果して新しい時代がどのような展開をみせるのか、そしてまたこの昏迷と波乱を乗りきる手だてが何であるのか、必ずしも定かではありませんが、しかし何れにしてもこの舞台を動かし、作り上げてゆくものは結局「人」であることだけは確かであろうかと思えます。そのような意味で、新しい発想と活力に満ちた若い頭脳への社会の期待が、今日ほど大きい時代はなかりかと思えます。技術者として新しいスタートを切られる皆さんが、こうした大きな社会的期待をしっかりと認識されて、これに充分こたえられるよう一層研鑽努力されますことを切に期待しております。

皆さんのご健康と、ご健闘を心から祈っております。

## 卒業生の皆さんへ

経営短期大学部主事 松 嶋 道 夫

経営短期大学の卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。3年間あるいはそれ以上働き学ぶ苦勞に打ち克って卒業を迎えられたことを心から祝福いたします。皆さんは、経営短大の26回目の卒業ですが、今回で昭和34年の開学以来約2,000名の卒業生を送り出したこととなります。経営短大は、地元で働きながら勉学意慾にもえる人達の夜間の短期高等教育機関として大きな役割を担ってきましたが、今年度、経営短大が経済学部と合体して、経済学部が昼夜開講を行うという改組が実現しましたので、経営短大の制度はいずれ廃止されることになり、卒業証書に書かれた経営

短大という名がいづれなくなることにさびしさがあるかもしれません。しかし、経営短大は廃止されても、夜間の教育機関は経済学部の夜間主コースにうけつがれて生れかわりますので、皆さん達の母校は名前をかって生きており、今後とも夜間主コースの発展を暖かく見守り、支援してほしいと思えます。

さて、皆さんは、卒業により働き学ぶ夜間の拘束から解放されて、その喜びは大きいことと思えます。すでに社会人である皆さんは、これから社会人になる昼間部の卒業生とは、卒業の中身も思いも少し違うかと思えます。昼間部の卒業生はこれまで学習がすべてで

これから仕事について社会人となりますが、社会人として夜間に学んだ皆さんは、人々が休養し、団欒する時間に夜学に通い学びました。二重の労苦に打ち克った経験は貴重なものですが、学習という面では、4年制卒業生の半分にとどまっています。皆さんは、社会人の経験は先んじていますが学習は半分なので、皆さんの卒業には、あとの半分を実社会で自分の力で学び続ける期待がこめられています。高度化、多様化した社会では、生涯学習が要求されますので、卒業を学習の終了としないで、学びの自立の出发点として、仕事や実生活と結びつけて学ぶ意慾をもち続けてほしいと思います。経営短大は、建学の精神として「労学同帰」（労働と学問は同一に帰する）をスローガンにかかげてきました。皆さんが卒業後もその気持をもち続けられれば、皆さんの人生は大きく開けてくることと思います。

皆さんはすでに社会人ですが、夜間に学ぶについては家族や職場の人達の配慮があっただけのことだと思えます。しかし、卒業すると、職場や社会や家庭で一人前の人間としての対応がせまられます。さまざまな面で、決断と行動が要求され、自立が求められます。依頼心をすてて、自らの頭で考え、自主的に行動する心がまえをより一層強くもってほしいと思います。職場では、自分の仕事に責任をもち、その役割を担うことによって社会の発展に貢献することは大切なことです。しかし、皆さんは多くの人達とのさまざまなつながりや協力に支えられていることを忘れてほしくないと思います。「仕事人間」「猛烈社員」で仕事のみ生きる人は、企業には忠実な社員として上役に評価されたとしても、仕事以外のつながりをすべてカットし、他人の心を切りすて、家族に内助の犠牲を強いること

になりがちです。社会的地位は、他人から評価されて望まれるもので、自ら背伸びして得ようとすれば、上役にごますったり、他人をけおとすため策をろうすることになります。そうして得られたものは、自己満足はできても、仲間や友人の心を失いがちです。最近離婚が増えているのは、夫婦が平等の人格であることを忘れ、一方的奉仕を当然のこととし、平等に協力し合う心が足りないことにあります。仕事ができるだけでなく、職場や家庭で他人の心への気くばりができる人になってほしいと思います。

それから、社会においては、大国間の歯止のない核軍拡競争が進み、我が国もその一方の国の同盟的役割が一層求められて防衛費は1%枠を突破し、国家機密を守るため言論の自由を制約しようという立法が企図され、国策遂行の巨大な財源確保のため売上税による増税が実施されようとしています。世界第二の経済大国といいながら、貿易黒字の外圧に苦慮し、福祉・教育は抑制され、円高不況、合理化や賃金抑制で、一部の豊かさの中で、多くの国民のくらしは苦しさをましています。皆さんはもう一人前の人間ですから、このようなことにも無関心であってはならないと思います。皆さんは、ただ仕事で稼いで楽しめばよいのではなく、社会の担い手として、職場や地域社会や家庭の中で積極的役割を担うことが期待されています。

仕事で役割を果すことは当然ですが、他人の生活や権利も大事にし、多くの人達との連帯の中で社会進歩の方向で役割を担ってほしいものと思います。卒業生の皆さんが立派な社会人として成長されることを望みます。



◇◇◇ 昭 和 6 1 年 度 停 年 退 職 者 ◇◇◇

|      |      |    |     |     |     |      |    |     |       |
|------|------|----|-----|-----|-----|------|----|-----|-------|
| 教育学部 | 文部教官 | 教授 | 石 原 | ミ キ | 工学部 | 文部教官 | 教授 | 齊 藤 | 仁 代   |
| 理学部  | 〃    | 〃  | 児 島 | 毅   | 〃   | 〃    | 〃  | 塚 島 | 寛     |
| 〃    | 〃    | 〃  | 小 林 | 貞 作 | 〃   | 〃    | 〃  | 白 鳥 | 一     |
| 〃    | 〃    | 〃  | 中 川 | 正 之 | 〃   | 〃    | 〃  | 井 村 | 定 久   |
| 工学部  | 〃    | 〃  | 高 森 | 三 郎 | 〃   | 〃    | 〃  | 若 林 | 嘉 一 郎 |

停 年 退 官 を 迎 え て

教育学部教授 石 原 ミ キ

シンガポール陥落を祝い、東京の街を提灯行列したことも、敵機が初めて東京の上空を襲い瞬く間に5か所から火の手が上がるのを見てガクガク震えが止まらなかったのも、私の東京での在学中のことであったと記憶いたします。敗色が濃くなった昭和18年9月、私は当時の東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を卒業して故郷富山に帰り、母校（旧富山県立滑川高等女学校）に奉職しましたが、二年足らずで敗戦となりました。

その敗戦直後の混乱の時期に、一旦はよき家庭人になることを決意して職を退いたのでありますが、富山市の戦災で校舎を焼失し、当時の雄山町（今の雄山高等学校の地）に移転していた富山青年師範学校に女子部が新設されることになり、昭和22年4月再び教職に就くことになりました。24年には富山青年師範学校が富山大学に包括され、25年から富山大学教育学部勤務となって今日まで、40年の長い年月をどうやら勤め終えさせて頂くことになりました。

はじめの頃は施設設備皆無の中で、暗中摸索を続けながら、それでも若さの故に胸弾ませて、学生と共に一喜一憂して過ごしたことを懐かしく思い出します。そして今、長かった筈の40年を振り返ってみますと、

さまざまな出来事の思い出が胸中を去来し、その一つ一つが自分の成長の糧になっていたことに気付きます。また、教育と研究に対する責任の重さを何時も大きく感じながら今日まで過ごしてまいりましたものの、省みて努力不足であったと思ひ残すことも多くあります。ただ学生の少しだけ先を一生懸命に歩いてきた40年であったということでしょうか。

最近になって私は健康を損ね、やりかけの仕事を多く残しました。私には私の健康を気遣い、私の停年を待ち望んでいる家族達があります。嘗て一度決意して果たせなかったよき家庭人に戻り、家族の希望に答え、健康第一に、命を大切に、そして遣り残しの仕事を少しずつ纏めていきたいと考えています。また今一度家政学についてじっくり考えてみたいとも考えています。

私は今、責任から解除されるという、爽やかな解放感を全身で感じ始めています。

定年退官を迎えるに当たり、今日まで暖かくお付き合い頂きました教科の先生方をはじめとする教職員の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、富山大学の今後益々の御発展を心からお祈り申し上げます。

（昭和62年2月12日）

## 退 官 に 際 し て

理学部教授 児 島 毅

昭和21年8月、旧制富山高等学校に奉職して以来、40年の歳月が流れてしまいました。思い出は多々ありますが、やはり、研究の上で他人の考えつかないこと、出来そうにないことをなし遂げたときの喜びにまさるものはありません。昭和31年頃はマイクロ波分光装置の電波源としてクラストロンの9GHz帯のものと23GHz帯のものとの2種しか入手できませんでした。スペクトルの解析中、32GHz附近にきめ手となるような大切な遷移があることを予測し、上記2種のクライストロンの出力を混合してその和の周波数のマイクロ波を作り、測定したことがあります。また、最近ではアセトアミドのマイクロ波スペクトルの測定解析に成功したことも喜びの一つです。この分子はメチル基の内部回転の障壁が意外と低く、私のライバルであるハーバード大学のW研でも長年にわたって研究されましたが解決できなかったものです。

私が研究を始めたのは昭和25年の内地研究員以後のことで、霜田研の方々の御協力も頂きましたが、博士課程を終えられたお方々の皆様と比べますと、全く独学と云ってよいものでした。高校生の頃、ラジオの組立に興味をもっていたので、実験装置は手製で作り上げ、測定と解析方法は発表されている論文を追試することで身につけました。追試とは論文の著者が行った測定から結果を出すまでの計算などを実際に自分の手で行ってみて、論文の結果が再現できるかどうか調べることです。最近、追試のできないような粗末な論文を時々見かけますが、そういう論文はとても信用する気にはなれません。

大学はいま、博士課程設置に向けて新たな出発をし

ようとしています。しかし、差し当たって大学受験機会の複数化や学生の臨時増募などの難問もかかえています。いずれにしても、現状維持は許されないことで、いつも新しい目標に向かって努力しなければならない時代です。教官の努力は当然としても、職員の方々の御苦労は並大抵ではないように思えます。

ここで、私が先輩の方々から頂いた言葉を記しておきます。先輩のお名前は伏せさせて頂くとして、その第一は“俸給の1ヶ月分位は研究に使いなさい”という言葉です。ある宗教では“収入の20%は神に捧げなさい”という教えがあるそうですが、これには反撥される方も多いと思います。実は私が研究を始めたばかりの頃ですが、当時は研究費も少く、会計上の制約もあって、米軍の放出物資であるクライストロンやダイオードは校費では買えなかったこと、外国雑誌の購入、旅費の自弁など、とても1ヶ月分では足りませんでした。現在では不適當な言葉かも知れませんが、結婚者にその位のことは話しておかれたらよいかも知れません。次は“外様大名にならないように”という言葉です。これは私が一応独立した研究者として認められた頃の話です。研究の主流をなしているグループからはずれないようにという意味です。最後は、某教授の方が定年退官される時話されたのですが“研究はわが命である”というお言葉です。私も今、その時をむかえ、その偉大な先生のように終身研究を続けられるかという全く心もとないのですが、そのお言葉だけは一生忘れないようにしたいと思います。



# 「ユリノキ」は残った

理学部教授 小林 貞 作

ユリノキは、富大キャンパスのメインストリートに植えてある街路樹である。ユリノキの名は、花がユリに似ていて木になるのでこの名がつけられ、一名「ハンテンボク」あるいは“Tulip tree”とも呼ばれ、前者は葉の形が半纏（はんてん）に似ているので、また後者は花の形がチュウリップのようなカップ状を示すので、それぞれ名前がつけられている。この植物は、北米原産の冷温帯気候に適した丈夫な街路樹である。わがキャンパスにもよく生育適応したとみえ、年々肥大生長をつづけ、最近では東大のイチヨウ並木には及ばないが、その風格・風貌の貫録でメインストリートの特徴づけるようになった。

ユリノキで並木にしようと決めたのは、たしか昭和34～35年ごろだったと思う。それは、富大の五福集中計画が固まり、分散していた文理学部（富山市蓮町旧富山高校）や薬学部（同奥田旧富山薬専）などが移転することに決めたことによる。文理学部（人文および理学部の改組前）は、昭和37年春に現在地に移転したが、これに先立ってメインストリートの並木にどのような樹種を栽植したらよいかという選定会議が行われた。この会議には、私のほか植木忠夫、柴田万年の両先生らも加わって、たしか2～3回行われたと記憶している。その結果決めたのがユリノキである。この植物を選定した理由は次の通りである。すなわち、この五福キャンパスは、神通川の扇状地にあるとはいえ、土質が悪く、表土下はほとんど砂礫のみで、有機質はすでに流失しているので、決して肥沃ではないのである。このことは、むしろ後になってゴマを栽培してみても一層はっきりしたことではあるが……。このようなやせ地には、イチヨウなどよりもユリノキの方が適しているだろうとの結論に達したのである。

そこで、ユリノキがメインストリートに植えられてから約30年、樹令にして35～40年（人文・経済学部寄りの方が古い）たっている。私が富大にお世話になって足かけ34年、そしてこの3月末で定年・退官を迎える。これは、ほぼユリノキの樹令に匹敵する年月を共に暮

らしてきたようなものだ。この間、ユリノキは、キャンパスの出来事を見守り続けてきただろうし、またこれからも残ってそれを続けることであろう。しかし、私はユリノキともキャンパスとも別れて立ち去らねばならない。「ユリノキだけが残った」の感がひとしお深い。

立ち去るに当って一言したいことがある。それは、ユリノキをジューっとよく見ればわかることだが、その大半は無残にも満身傷身ということで、無傷のユリノキは一本もない。表皮のはがされたもの、針金やビニールひもが幹に深く食い込んだもの、枝が折れ枯れてぶら下がっているものなどである。このような被害は天然では決して起らない。必ず加害者、それもはずかしいことだが、大学人という名のもとにいるのだからかなわない。自分たちの大学の並木を荒らす大学人は、他の大学にはいるだろうか。すべて人為的な被害といたい。それは、並木にがんじがらめにしぼり付けた巨大な立看板や吊看板はじめ、大小さまざまな幹にしぼりつけた宣伝・告知等の看板類まであって、やればやりっ放しのままで放置する。キャンパスを出た市街地の並木にこんなことをやるなら、市当局から大目玉を喰らうに違いない。退官のあと、4月のユリノキ並木の最も大切な萌芽期に、例年のような巨大看板の林立する並木いじめが、またはじまるだろうか。去る人にはわからない。

富大を去るにあたり、私にとってユリノキのほかに残ったものが二つある。その一つは、このキャンパスで研究させて頂き、国際的にも知られるようになった「ゴマ属植物の育成系統の保存」で、かなりの系統数がある。これからのゴマを含めた油脂資源植物の研究上、とくにその遺伝子資源として役立つことであろう。他のもう一つは、上記ゴマ研究で書いた岩波新書「ゴマの来た道」の出版である。この二つは、富大で研究上の置き土産の形になったが、メインストリートのユリノキだけは、毎年その樹上に立派なチューリップの花を咲かせて欲しい。

## 定 年 を 迎 え て

理学部教授 中 川 正 之

私は本年3月末定年退官の日を迎えることになりました。富山大学が発足して間もなく昭和24年末に参りましたので、それ以来37年余り大学に御世話になりながら今日まで共に歩んできたこととなります。しかも、私は文理学部の前身の旧制富山高校に学びましたので今居ます理学部は母校であり、そして人生の大半を過ごしたところであるので特に深い愛着をもっています。いまここに本学を去るにあたって感慨なきを得ません。

私が文理学部の物理の先生として来た当時は文献も実験装置も殆んどなく、学生諸君の力を借りながら、鉄線を巻いて抵抗器を手製したり、何とかして手に入れたボロ旋盤で装置を作る等々、時間と労力の浪費の連続でした。社会では盛に“文化国家建設”が叫ばれているにも拘らず研究室は一向に豊にならず長い間“駅弁大学”のレッテルを貼りつけられたまゝでした。当時の学生諸君の盛んな向学心を満足させることなしに社会へ送り出しましたが、今夫々の職場で大いに活躍してる姿に接するにつけ当時が懐しい思出として蘇っていきます。

その後、戦後の復興が軌道にのり経済の成長に伴って富山大学も着実に充実を遂げ今日の立派な姿に変身

しました。昔日の姿を思うとき隔世の感があり、歳月の重みを感じずにはおれません。

今日に至る間、各の時代を反映した考えをもつ学生が在学し、種々の経歴と夫々新しい主義・主張をもった新人教官も少しづつ増えてきました。他方、大学の外からは社会の様々な立場よりの要求や批判が次第に強くなりつつあります。実用や経済効果による評価の時流の中、それ等とは無縁な純粋に学間的な研究をこの際従来にも増して盛り立てたい気がします。

以上のように大学も大学を取巻く社会的環境も大きく変貌してきたにも拘らず、私自身はと云えば、戦前・戦中に出来上った考え方がその後進歩も発展もないままにどうやら今日まで来てしまったような気がします。そして、富山大学のために何の御役にたったこともありません。すべてを新鋭にバトンタッチし静かに去ります。

今キャンパスは冬枯の百合の木の前木と銀杏前木が非常に美しい時です。これ等の木々がやがて巨木に育つ頃、富山大学も立派な大学に発展することを祈ります。

## 退 官 に 際 し て

工学部教授 高 森 三 郎

大学進学以来、富山の地を離れていた私が、富山へ戻ったの療養生活を余儀なくされたのは昭和22年の春であった。幸い療養の甲斐あって社会復帰するまでになり、会社へ復職するか、それとも富山で……との選択を迫られることになった。当時の都会は、戦争の後遺症が残っており私には住み難いところであった。一方、富山には雄大な立山連峰など豊かな自然が息づいていた。私はためらわず、富山に止まることに決めたのである。

病に冒されなかったら、そのまま都会での生活を続けていたに違いない。とすれば、定年退官まで無事勤め終えることが出来た富山大学との出会いも、すばらしい富山の自然の中での生活もなかった筈である。病が私の人生の転機になったことを思うと「人間万事塞

翁が馬」の感を深くするものである。病気中のブランクは、人生における大きなマイナスである。だが、そのマイナスを埋めて余りある富山の生活でのプラス面を、いくつか書いてみたいと思う。

日本人の頭の中には都会志向、わけても東京志向の観念が強く、田舎と言うとやゝ軽蔑の意を含んでいることが多い。フランスでは、田舎と言うと褒め言葉だそうだが、大違いである。しかし、近頃はUターン現象が生じ、地方の時代と言うことで経済も教育も地方分散の必要が取り沙汰され、ようやく地方にも目が向けられるようになって来た。人間には空気は不可欠のもの。しかるに、空気の有難味を平素意識している人は少い。これと同じで、富山に住んでいる人々でも、案外富山のよさを認識しないで過ごしていることが多

い。熟知の人には釈迦に説法だが、ここで再認識の材料をクローズアップさせてみよう。

富山の自然の美しさを代表するものは、何と云っても立山連峰のすばらしさであろう。殊に私がよいと思うのは、呉羽丘陵から眺めた全容である。2500～3000 m級の山並みが、劔岳、雄山、薬師岳を含み30余峰も、恰も屏風を立てたが如く連なっている。その雄大な景観は、何度見ても見飽きることがない。特に白雪に覆われた山肌が夕陽に映え、澄み切った大空に聳り立つ雄姿は、美の極致と言っても過言ではあるまい。日本の屋根と言われる程の連山を、平野部から仰ぎ見ることの出来る個所は、全国広しと言えども見当らない。まして、海岸や富山クラスの市街地から間近に展望出来る所は、世界中でも数える程であろう。否、ひょっとすると皆無かも知れない。

すばらしい自然の次に挙げられるのが、おいしい海山の幸である。庄巻は、何と云っても日本海の魚介類である。特産の甘えび、ばい貝、ほたるいかなど、数え挙げれば切りがない。東京に住んでいる魚嫌いの知人が富山へ来た折、魚料理でもてなしたところ「魚ってこんなにおいしいものとは……」と驚嘆した。また先年、山陽を旅した時、宿で出された夕食の魚は、瀬戸内海でとれた新鮮なものだが、今一つ物足りぬ思いをした。内海でゆっくり育った魚と、日本海の荒波に揉まれ育った魚の違いが味に出るのであろう。

次は豊かな自然環境と噛み合った教育環境である。最近、富山は教育県だと言われている。なるほど、国立大学合格率は全国のトップクラスだとか。そのような結果もさることながら、豊かな自然が子ども達の心身に与える影響の方を私は重視したい。これは富山に限ったことでなく、一般に田舎と大都会との関係になるが、日本で一流と言われている人の東京出身者は、

人口割合からみて比較的少い。東京は日本の中心、その東京へは多くの人材が集まるのに、その子弟が成人して後、いわゆる大物と言われる人が割合出ないのはなぜだろうか。自然環境に左右されての結果と言うのはいささか極論に過ぎるだろうか。庭のある広々とした家も、大らかな人物育成に一役買っているように思われる。狭いマンション住いでは、子ども達の背丈も伸びず、家族の多い場合は、イライラからくるストレスで胃が悪くなる人も増える傾向が見られるとか。子育てには、田舎が一番と思うがいかがなものだろう。

ここまでは富山の良い点ばかり列挙したが、デメリットも少なからずある。雪の問題しかり。東京から遠いこともその一つである。雪の問題は、雪に親しみ雪を利用するとの積極策へと発想の転換がされつつあり、他方では融雪、除雪の機器も次々と考案され、冬も快適に過ごせる時代の到来も夢ではなさそうである。また、高度情報通信システムなどの発達により、東京が近くなる日もそう先のことではあるまい。富山のデメリットも技術進歩がやがて解決するかも知れないが、心の持ちようでも人生を楽しく過ごせることを強調したい。病もまたよしとする考えは、或いは諦感を理屈付けしたに過ぎぬと言う見方もあるだろう。しかし、“禍福はあざなえる縄の如し”とか、禍を福となすも禍の重圧に潰されるも、個々の人の考え方いかんによるものと思う。病気をしてよかったとまでは言えぬが人生観が変わったこと、富山を再発見しそれを喜びに出来たこと、この地で知り得た方々とのうれしい交流などは病気の余徳と言えよう。

私の過ぎ来し方を振り返って、概ね満足出来る人生と思うと、これも多くの方々の有形無形のお力添えやご温情の賜物と、退官に当り、ここに更めて謝意を表する次第である。

## 大いなる流れに浮遊して

工学部教授 齊藤 仁 代

いつの間にか年を重ねて、人生の一つの節目停年を迎えることになりました。生れ育った当地の富山大学に36年もの間、お世話になりました。今日まで命がもらえることが出来たことを喜ぶと共に、諸先輩先生ならびに同僚の先生方に心から深謝申し上げます。

節目に立てば、自然と回想ということになります。県外生活8年余は学生、軍隊、会社勤めでしたが、開

戦から終戦、戦後という大変な時代でした。学徒動員ノースアメリカンの来襲、最初の本土空爆、炎上間も無い廃墟の富山市街と、暗いイメージを目で体験致しました。

大学が発足して間もなく、工学部に奉職させて頂きました。当時、戸惑いもあって、“新制大学の目的はなにか”と愚問を発したことがあります。世間では学

問の機会均等というような言葉があったと思います。電気工学科では、電気工学第1, 第2, 第3, 第4とナンバー講座名であり、製図の単位は6単位もありました。蛍光灯のない時代ですので、照明の不備な、暖房のない製図室で学生諸君は頑張ったものです。先輩諸先生方が苦勞されて準備された電気機械の中には海軍工廠からのものが目立ちました。

富山県及び電力会社の御援助で、500KV試験用変圧器及び高電圧実験室が、昭和29年4月に完成し、当時としては有数の設備でした。残念なことに、付属設備の故障、測定器の不備、運転操作の不便さがありました。その後、風雪、鳩の侵入という障害が加わり維持管理に難渋し、充分その偉力を発揮出来ませんでした。しかし、学生諸君には思い出となる実験実習の役目を果たしたものと思います。移転の際には、施設課の職員の方々は大変苦勞されたことと思います。私も、それ相応に頭痛の種でした。というのは製作されてか

ら45年もの歳月を経たものが、移転してから、どれだけ持つかということです。移転したのですから私なりの推定結果を認めて頂いたものと思っています。操作システムの更新、付属設備の整備によって、格段の差で性能が向上致しました。一応、移転の責めを終えて安堵しています。実験室も格段の差で立派にして頂きました。さてこれからと思う時に去らねばなりません。後に続かれる先生は有効に利用されて、教育に御研究に大いに成果を上げられるものと信じています。

思えば、赤谷山遭難のこと、学園紛争のこと、石油ショックと就職難と、いろいろの出来事が世の移り変わりと共に起きては過去のものとなって行きました。経済大国、国際化時代となって、時は今、大学の躍進の時になりました。去る者に取っては目出度い限りです。終りに大学の発展を祈ると共に、いつまでも見守って行きたいと思っています。

## 定 年 退 官 に あ た っ て

工学部教授 塚 島 寛

昭和26年5月に高岡の工学部に赴任して35年あまりになり、工学部第一回卒業生から、ともに勉強してきましたが、愈々私も学園を去ることになりました。多くの先輩、同僚の先生方、事務関係の皆様方の暖い御配慮、御協力により、健康裏に、無事定年を迎えることができました。深く感謝致しております。振り返ってみますと、長い年月のため懐しい思い出が走馬灯のように脳裏をかすめて行きます。例えば三八豪雪、大学紛争、公害問題、大学院工学研究科設置、薬学部分離、医科薬科大学への移行、石油危機、工学部新築移転など、過ぎてしまえば印象も薄れてゆきますが、私にとって忘れられない、いくつかの思い出を述べてみましょう。

1) 魚津埋没林、埋没材の人工石炭化に関する研究  
私が工学部に赴任した、昭和26年頃、富山県顧問をしておられました、阿部良之助先生(旧満鉄での石炭液化の研究指導者)が、天然石炭化の進行途中にある埋没材を用いて、人工的に、石炭化を進める研究を、行ってはといわれ、先生の御指導により、オートクレーブを用いて実験を進めました。当時は研究資材の乏しい時代で、内容積1ℓのオートクレーブの本体のみの購入に、年間の講座費がなくなる時代でありました。さらに阿部先生の御紹介により北大、武谷憲教授の御

指導を受けることができました。武谷教授の研究室では当時わが国では初めて石炭の研究に、高分解能NMRを利用され、外国に勝る立派な成果を発表され、私も同研究室へ内地留学して、埋没材の人工石炭化生成物のH-NMR構造解析を行い、構造を明らかにすることができて、優れた成果を発表することができ、大変ありがたく思っております。

2) 文部省科学研究費エネルギー特別研究(特定研究)研究補助金の交付について

昭和48年のオイルショックにより、それまで安価に大量輸入されてきた石油のため、殆んど省みられなかった石炭が見直され、昭和53年度より、文部省でも先づエネルギー特定研究その後、エネルギー特別研究グループができて、3年毎に更新されましたが、昭和61年度で完了しました。そして本年度まで9年間に総計2030万円の研究費を交付され、多くの新しい研究機器の購入により、優れた研究成果を得ることができて深く感謝しております。そして申請すれば交付されるわけではなく、常にきびしい審査がなされ、自分の研究の特徴、利点、独創性を強調せねばなりません。あまりオーバーにやると、次の機会に出来るといって出来ていないではないかといわれ、事実予定通りに進まぬこともあり、困るわけであり。また研究

報告書またはそれに類するレポートは、年間3～4回は書かねばならず、それには常に新しい内容、新しい成果が書かれていなければなりません。研究発表会も年2回はあり、勿論、内外学会誌への投稿、学会発表があるか問われるわけであります。そして評価委員の先生がおられ、3年毎に審査、更新があり、駄目と見られると、研究グループから外され、新しい人が入ってくるわけです。とにかくこうして過去9年間研究に一生懸命で、油断することもできなく、頑張ってきましたが多くの新しい成果、特許を得ることができてありがたく思っております。しかし楽しい思い出も多く、この研究グループを通して、日本を代表する著名な先生方と親しくなることができて、研究上のディスカッション、新しい研究の進め方など、学校のこと、学生のことなど、いろいろ話し合うことができて大変有益でありました。

### 3) 13C・F T-NMR分析装置の購入について

学内共同利用研究施設であります、この機器は有機化学に関する研究には大変実要で、なくてはならぬもので、早急に入手を希望しましたが、理学部でも希望され、いろいろと曲折がありました。当時工学部長であり、現学長の大井教授の並々ならぬお骨折によりまた多くの他の先生方の暖かい御協力により、昭和57年12月に工業化学科に設置され、その後大きい故障もなく、すべて無料で他学部の試料も測定して今日に到っています。当時予算は3400万円で、約5000万円相当の機器が、購入されたこととなります。また宇佐美教授の所のGC-MS分析装置(3600万円)、私の所でその後購入できましたFT-IR赤外分析装置(600万円)とともに、今後本学の先生方の研究に多くの利益をあたえるものと信じております。

## 研 究 雑 感

工学部教授 白 鳥 一

東芝の研究所に在職中、仕事の合間に不均一反応に関する絶対反応速度の新理論確立を手掛け、これの立証を行なうべく、一連の研究プランと数多くの種類の金属を持って当大学に移って来たのは今から10有余年前である。来てまずなすべきことは研究室でのプロジェクトチーム作りであった。研究プラン通り実施するためには是非とも研究室員を組織化し、各人が狙うべきターゲットを定め、それぞれに責任分担させることにある。もちろん各人一人々々が仕事に打込めるよ

### 4) モルモン教について

昭和57年1月米国ソルトレーキシティのユタ大学デイリ教授と、北海道大学大内教授が、協力されて、石炭の直接液化に関する日米セミナーが、ソルトレーキシティのホテルで開催され、約50名の参加者があり私も参加して発表を行いました。またソルトレーキシティはモルモン教(キリスト教の一派)の本部のある所で、壮大な建物が多く建ち並んでおり、ここの市民の多くは信者であり、ユタ大学の教授も大多数が信者であるとのことでありました。そして平素の戒律に驚きました。煙草、酒類、コーヒー、コーラ、紅茶、日本茶など、興奮剤の入ったものはすべて飲用禁止で、ジュースと水はよろしいとのことでありました。そしてこれがすべて守られているとのこと、研究発表会後の懇親会でも酒類は出るが、信者の先生は口にされませんでした。自由主義のアメリカで、非常に多く若い人が酒も煙草ものまぜにいるということは、考えさせられました。宗教上のおきてであり、先にもわが国で若い女の人が集団自殺をしましたが、当人はそう苦痛に思わないのかもしれませんが、普通の人のできることではありません。それにつけても教育もこのようではならぬのではないかとも思われますが、いかがなものでありましょう。強制ではなしに研究に全智全能を傾けさせるようにしむける研究指導者、教育者は理想でありましょうか。

さて、つまらぬことを述べてきましたが、私自身大学教官として、研究と教育に専心没頭できましたことは私の最大の幸せであり、最大の生き甲斐であったと喜んでいる次第であります。

う研究環境に気を配らなければならないことは言う迄もない。そうすることによって若手は先輩を見習い、教えられて育ち、いづれ独立して行くことになる。これが従来からのやり方であり、企業内でも若手の育成にこの手段が採られていることは事実である。

しかしながらいきなり私自身の考えを研究室員にぶつけ、性急に彼らを研究プランの実施に追い込めば、かならずどこかに無理を生ずるは必定。止むを得ず「急がば回れ」のことわざ通り、たっぷり時間を掛けるこ

としたのである。勿論可成りの期間待たなければならぬだろう。いずれにしても若い者は、真剣になって巾広く基礎知識を身に付けることから始めて欲しいものだ。もちろん夢を追うのもよいが、学位が目的であってはならない。すべからく悔いることのない“生涯を通じてのテーマ”を持ち、行きがけの駄賃とでも言うか、学位がひとりについて来るようであればならぬだろう。

結局、当座は研究室を希望して集まって来た大学院生と協同研究することにしたのだが、彼らには high level の仕事はとて無理であり、実験のテクニックとか実験上の環境汚染対策の問題とか、身に付けなければならぬことで精一杯、しかしながら彼らの得たデータは reliabilityless ではあるものの、仕事への寄与は大きい。

さて、不均一反応は触媒反応と電極反応とに二大別される。どちらも本質的に大きな違いはないが、後者は速度制御が容易であり、steady state がたやすく得られるという理由で、新理論立証のためには至って好都合である。しかも多くの電極反応の中でも比較的単純な 2 原子分子生成反応である水素電極反応が適当であり、新理論の妥当性の証明は multistep reaction であるこの機作の解明に姿を変えることができる。

水素電極反応の機作は考えられる三つの素反応の alternative の問題に帰せられる。これらの中から結論的に一つの素反応 - Tafel reaction - にしぼり込み、新たな理論的構想のもとに得られた速度表示の基本式に前反応の Volmer reaction が平衡にあるとする部分平衡条件を持ち込み、さらに Bethe 近似を採用することにより、最終的に水素電極反応の絶対反応速度表示式が得られる。

さて、吸着水素原子を金属面から引離すに要するエネルギー、ならびに吸着層における水素原子間の相互作用エネルギーが既知であれば、新理論から反応の活性化エネルギーを正確に数値計算することができる。

上記の両エネルギー既知の金属面で引き起された水素電極反応の活性化エネルギーならびに Tafel 定数についての数値計算結果は実験値と正確に一致し、特に金属-水素系で第一種のみならず第二種の相転移現象の見られるバナジウム族、チタニウム族など従来実験上コントロール不能で傍に追いやられていたこれら金属面での水素電極反応については理論から予測されるものと実験結果とは現象的にも、数値的にも完全なる一致を見た。換言すれば、結論的に水素電極反応の機作が、金属の種類に拘らず Tafel reaction であることを完璧に確認し得たことはなる。

We are not here prepared to say much about the conceptional details of our rate theory. As a matter of fact, the agreement is better than we could reasonably expect, on account of the approximation made by Bethe. In all things considered, we may lay the excellent agreement to the validity of our rate theory for the heterogeneous reaction, like the hydrogen electrode reaction.

なお、前述のように水素電極反応の機作を理論と実験との一対一の対応から結論付ける手段でなく、前人未到の「実験で機作を確定する方法」を案出し、ここ半年掛りで装置を作り上げ、ついでこの文章を書き始める一週間程前にやっと実験を終了したばかりなので、結果の解析が楽しみである。

旧大学院時代から東芝の研究所暮らし、さらには本大学で今日迄研究三昧、一生の仕事として取り組んできた Kinetics もいま一步の処迄来たようだ。

Memories of happy days remain with us!

甚だ一人勝手な文章となってしまったことを心からお詫び致します。若い諸君の今後一層の努力を期待し、富山大学の御隆盛を心からお祈り申し上げ攔筆する。

# 退官に際して

工学部教授 井村 定久

定年退官を迎えるに際して、三十二年の教官生活を振り返る機会を与えられ、色々と思ひ出すことがありますが、さて文章にというとな何を書いたらよいかと迷ってしまいました。指定された原稿七～八枚には到底達しません、思いつくままに書いてみました。

思い起すと、東京工大の恩師から富山でしばらく勉強して来いよ、とすすめられて昭和三十年、富山大学工学部に機械工学科が新設されるのを機に赴任して来たのですが、本当にしばらくという気楽な気持ちで参りましたのに、以後三十二年の長い間、定年まで勤めることに相成り全く驚いております。今日までの長い年月を健康で、しかも大過は勿論小過もなく勤め終えることができましたことは、本当に有難いことで、私の周囲を去来した多くの先輩の諸先生方、ならびに同僚の先生方のおかげでございまして、心から感謝する次第でございます。殆んど富山大学の生活は高岡市で過ごしたことであり、富山市はここ数年にすぎません。退官に際して高岡は本当によい所であったなあ、ただ雪さえ降らなければなあ、という印象をもって表日本に帰ります。退官の最後の年の積雪が現在の所零なんてちょっと残念ですね。

赴任以来随分長い間人材の確保に苦勞致しました。当時、機械工学科の卒業生の就職先は関西、中京方面が主体だったと思います。当時はまだ地元指向はありませんでした。所得倍増などの景気の良い時代脊京がありましたので、大学、公務員など目もくずれに民間

会社に就職して行くものが殆んどでした。大体、機械工学科の学生はお利巧ですので大学には残りたがりません。現在ですと社会情勢の変化から逆転しておりますが、その結果講座の担当授業科目の講義を一人で全部担当せざるを得ず、その時期が非常に長かったのが忘れられません。

前年度停年退官した金属工学科の池田教授の「停年退官を前にしての雑感」の文章の中で校舎の裏で2m近い長さの蛇が悠々と蛇行している光景を度々見受けたと書いておりましたが、昭和三十年代には私の実験室内を蛇が時々出入りしており、蛇を一日に2度見かけるという体験も致しました。生来、蛇を見ると竦んで動けなくなる私ですので、実験室に入れず、実験室の奥にあった教官室に入れなかったことを思い出します。講座の事務官も私同様蛇が苦手、蛇のつかめる人を学内で探し出して、来てもらった時にはもうどこに隠れたか、不明という体験は随分嫌なものでした。また出てくるかも知れないと思うと、しばらくは恐る恐る実験室内を往来する羽目になってしまいます。実験室の周囲が人騒がしくなるにつれ、また駐車場となり、アスファルトが敷きつめられるようになってからは、もう現われなくなってしまいました。なつかしく思い出されることでした。

脈絡のないことを綴りましたが、終りに富山大学が大学として今後一層の充実発展することを念願して筆をおきます。

# 生産技術への愛着

工学部教授 若林 嘉一郎

私が京都大学・機械工学科を卒業したのは太平洋戦争真最中の昭和18年9月であった。そして、卒業と同時に海軍技術士官（見習尉官→大尉）となり千葉県木更津市にあった第二海軍航廠（略称：二空廠）に勤務した。二空廠は木更津航空隊の故障飛行機の修理工場であり、そこでは私は「航空発動機の分解・組立作業標準の作成」と「点火栓の製造工程の改善」に従事した。ここに、それらの仕事はいずれも動作分析、工程分析に基礎をおく生産管理技術の応用であり、仕事の性質は大学の卒業研究と何ら変るところがなかったた

め、毎日が実に楽しかった。

某日、捕獲された米国の戦闘機グラマンの分解作業を見学したが、敵機の塔載発動機は機体に装着したまま先端から順番に分解できる構造となっていた。ここに日本機では、先ず発動機を機体から外ずして架台に取り付けた後それを後方から分解し、途中で発動機を裏返し、その後は先端から分解する構造であった。したがって、機体に装着のまま分解できた敵機では設備の貧弱な前線基地での修理が可能なケースが多かったのに対し、日本機はいちいち設備の完全な後方基地

へ運ばなければならなかった。

メンテナンスについて迄、きめ細かく配慮するという米国の機械設計の思想には心を打たれた。

日本の発動機はコンパクトに作られたため、その分解作業が面倒になったのであるが、コンパクトであったため、体積効率（容積当たりの出力）の高い発動機ができた。この高体積効率を活かして零戦の高旋回性能がうまれたのであるから、これを思えば、低メンテナンスビリティ（保全性）を一概に欠点とは断じ難い。

ただし周知のように、戦争の末期では、零戦の戦闘能力はグラマンを下回るようになった。ここに、グラマンの第一の特徴は旋回性を無視した超高速飛行性にあった。小錦のパワーが若島津の技を圧倒している現状が戦争末期のグラマン対零戦の姿であった。

グラマンの第二の特徴は豊富な物量にある。敵機の豊富な物量は米国・航空機工業の大量生産技術の所産と見る向きが多いが、私はそれ以外に高メンテナンス性を挙げたい。

戦後しばらく、郷里・富山の農機具会社に勤務したが、そこでのおもな仕事はやはり生産技術であった。

この会社が倒産したので、恩師・菅原先生（熱工学特に蒸気工学の権威）のご紹介で、昭和26年4月から福井大学・機械工学科に勤務することとなった。

福井大学は菅原先生の弟子であるとの理由により、私を熱工学講座に配した。かくして、菅原先生のご指導のもと、熱移動、物質移動を研究することとなり、生産技術とはしばらくお別れとなった。

その後、静岡大学へ転勤したが、研究テーマは変わらなかった。その結果、昭和37年2月に学位を頂くことができた。

昭和38年4月に本学へ転勤したが、今度は化学工学科配属となった。私のそれ以前の研究（熱移動、物質移動）が化学工学の基礎学問の一つに当たる輸送現象に一致していたことから、富山大学が私を化学工学科教授としてご採用になったのであろう。

化学工学の使命は工業化学的技術者が開発した技術（たとえば、石油や鉱石から癌の特効薬やファイナセラミックスを作る技術）を工業化することである。

ここに工業化とは、大量生産の実行手段と品質、安

全の保持手段の結合である生産技術のことである。

ここで、蛇足を加える。

海軍の頃の生産技術は大量生産と品質の2要素の保持を目標としたが、戦後になって上記2要素のほかに安全という要素が付加される機運が生じた。ただし、昭和40年頃は、安全工学の生産技術要素としての地位は今程高くはなかった。

本学で化学工学科に配されたチャンスに、私はあの懐かしい生産技術に接近しようと決心し、研究対象を安全工学と定めた。

当初は蒸気爆発を研究したが、そのうちに爆発防止の固有技術だけでは安全工学が行き詰ると悟った。そこで、他に先駆けて安全工学のシステム工学接近を企て、昭和47年にはその研究結果第1号を発表した。それはメンテナンスを考慮に入れたシステム信頼度の追求であったが、この研究は米軍機グラマンの設計におけるメンテ尊重の姿勢に示唆された。

その後、この信頼性工学に人間工学的特性（人間の制御特性）を付加するという過程を経て、知識工学的研究に走り、現在は異常時処置支援システムの設計における効率的知識獲得法を模索している。

私は数年前に、本学の附属図書館長を勤めたが、その当時の文部省情報図書館課が計画していた学術情報センター（現在の文献情報センターが作られる以前における文部省案）との結合準備のため、データベース管理システムを勉強した。そのお蔭で、知識工学における知識ベースの機能を比較的容易に理解できた。

化学工学協会が昨年3月に開いた第1回知識工学シンポジウムでは私は講師の1人に加えられた。また、本年5月開催予定の化学工学協会のプラントオペレーション工学講演会においても知識工学の講演を依頼された。これは若い研究者の推薦によるものである。若い研究者の邪魔になることを恐れながらも、若い方々のお誘いには極力応じることにしている。

大学を卒業したばかりの無垢な私が最初に出会ったのが生産技術であり、それが私の生涯を左右した。

対象が仕事であろうが女性であろうが、人世では最初の出会いが本当に大切であると痛感している。



## パキスタンの発掘で知合ったチャーリー君

人部学部教授 小谷 伸 男

私は1986年10月から12月まで、パキスタンのガンダーラ仏教遺跡の発掘調査をしていた。私は他の隊員より二週間遅れてひとりかけつけた。大阪空港からシンガポールを経由してパキスタンのカラチへ、約15時間。カラチから首都イスラマバードまでPIAで約2時間。そこから車で東北へ約3時間、パキスタン西北辺境州、マルダン県シェワ村キャナルバンガローが日本隊の宿舎。発掘はすぐにフル操業に入った。日本人隊員8人にたいし、村人450人、ロバ150頭を雇う。ロバつかいは10才くらいの子供が多く、遊びざかり。あちこちで掘りはじめると、人夫への指示や出土遺物の整理で、私たちはかけまわらねばならぬ。怠けもの人夫やロバには、ときおり叱咤せねばならぬ。そうしたとき一きわ元気な声でどなるのがチャーリー君。それも日本語でだ。

チャーリー君はアメリカ、ヴァーモント州出身のアメリカ人学生、25才。祖父が宣教師であった関係で幼年時代を日本で過した。また大学生になってからも同志社大学に留学し、つい最近までは発掘隊の隊長西川幸治教授(京都大学工学部建築史)のもとで研究生として過していた。日本のかやぶき民家に関心をもち、その美しさや機能性を追究するため日本各地をあるいて調査した。富山県八尾にもきたことがあり、そのときの報告の一部を北日本新聞に掲載してもらっていた。しかし将来の志望は研究者よりジャーナリストである。現在は大学院進学準備のかたわら、見聞をひろめることにつとめている。中国大陸を横断し、アフリカの西海岸までの旅行を計画し、うまくゆけば途中パキスタンで私たちと合流する約束がしてあった。8月20日、自転車をかついで日本を出発。船で上海へいき、北京、西安を見学した。自転車はもっぱら市内見物のときつかう。西安からさらに西のウルムチへ。ウルムチからバスでカシュガルへ。カシュガルからパキスタン国境まで中パ公路がつづいている(520km)。国境のクンジェラブ峠は海拔4934m。パキスタン側の道は全面舗装のカラコルム・ハイウェイとなり、ギルギットを経てイスラマバードまで、約850km。この道は中国人技師の手により、15年の歳月をついやして1979年に完成。しかし外国人に開放されたのは1986年5月1日以来。チャーリー君はこの道をバスにのっ

てやってきた。正確な地図ももたず、現地のことばもわからないまま、親切な中国人、ウイグル人、パキスタン人にめぐりあい、10月11日無事私たちの宿舎にたどりついた。パキスタンに入るまで一か月間毎日焼ソバばかりたべており、宿舎の食事がおいしいという。そばでみていると、からだは小柄だが、かなりの大食漢。私も一度はクンジェラブ峠をとおり、パキスタンから中国へぬけてみたいと思っているが、かなりの体力がいりそうだ。はたして耐えられるか。

チャーリー君はひじょうに礼儀正しい。みていて気持がよい。またたえず他人に気がねする。その遠慮っぽさは、かつての西洋人にたいする日本人のようである。すっかり日本人になりきったか。日本語が上達して、「英語には自信がありません」という変な外人である。しかし私たちが英文で書類をかいたり、発掘遺物のリストをつくる時、いろいろ頭をひねって適切な用語を出してくれる。専門用語は私たちが教えることもあり、こんなことばは始めて知りましたという。英和辞典で確かめている。記者志望だけあって、パキスタン英字新聞の文章についても手きびしい。12月13日かれはイスラマバードのアメリカ文化センターへ大学院入試共通テストをうけに出かけた。その成績はアメリカのかれの志望大学に送られるという。「今年は失敗かも」と笑っていた。発掘に熱中しすぎたせいか。カラチまで隊員たちと同行し、カラチでアフリカ行きの船をさがしていた。

すこし話しはかわるが、私と西川氏二人は、車でカラチにむかう隊員と別れ、イスラマバードからラホールに飛んだ。そこでラホール滞在丸6年の日本商社マンの家庭を訪ね、夕食をごちそうになった。一昨年と同じころ訪ねている。その間子供さんはずいぶん成長し、今娘さんは高校三年、息子さんは中学一年。娘さんはアメリカの大学へいきたいという。日本の受験戦争にはついていけないからだろう。息子さんにさりげなく現地の学校の様子などきいたが、まず口ごもって日本語がすぐにでてこないのに驚いた。小学校2年のときにパキスタンにきた。姉さんは弟のことを日本人ではないみたいと笑う。今年6月に帰国されるが、いわゆる「帰国子女」として日本の学校にもどることになる。親としては心配なことが多いという。

それにしてもアメリカ人帰国子女チャーリー君のなんと積極的なことか。異文化体験を生かし、さらに多くをもとめて旅をする。宿舎ではよく食べよく下痢をした。絶食し、薬をのんだが回復せず、心配になってペシャーワルにいる日本人医師（ミッション・ホスピタル、救急施設勤務）にみてもらいにいった。中村ドク

## アフリカのビール

教育学部教授 田中 晋

アフリカはタンガニカ湖の調査へ行くことになって、この道の先輩のところへあいさつに行ったところ、マラリアが再流行しているぞ、住血吸虫には気をつけろ、眠り病もあるぞ、とさんざん脅かされた。調べてみると、このほかにも黄熱、回帰熱、フィラリヤ、コレラ、A型肝炎からペストにいたるまで、この種の病気はいくらでもあるようで、今話題のエイズもアフリカの中央部が発祥の地らしい。こう書けば病気の巣窟のようになってしまうが、現実には多くの人は健康に暮しているわけで、用心にしたことはないが、罹るかどうかはわからぬ病気を心配してみてもはじまらない。というようなわけで、気も軽く出発することになった。

さていよいよ出発することになってまず頭にうかんだのは、病気のことよりも冷いビールが飲めるのだろうかという心配であった。根が卑しいせいで、われながら困ったものである。目的地はタンガニカ湖に流入するマラガラシ河の河口域で、その近くには電気のある村などありそうにもない。電気がないと何が不便かといえば、ビールを冷やす装置のないことである。出発前にわが学部のOBで酒店を営んでいるM氏にグチをこぼしたところ、化学的に冷やす冷媒を何種類か持ってきてくれた。これはかなりの重さがあったが、背に腹はかえられぬとスーツケースの中へ入れ持参することにした。ついでにM氏はアフリカのビール事情について書かれた文献を用意してくれた。

さて、長い飛行がやっと終りケニアの首都ナイロビの町に到着した。海拔1,700メートルにあるこの町は年中涼しくすごしやすいところであるが、まずは無事の到着を祝して乾盃である。ケニアにはビールを醸造している会社は1社だけであるが、味のちがう4種類のビールがあって、その時の気分で飲み分けることができる。いずれも日本のビールにひけをとらぬうまさである。中でもお徳用でケニア人に好まれているのは

ターは「これは抗生物質などの薬ではなおらぬ。独行者に特有な寄生虫による下痢。食べながら治しなさい。お腹の虫と仲よしになりなさい」という。安心してまた食べはじめた。いつかまた再会したいものだ。きっとアメリカと日本いやアジア双方のよき理解者、そしてよきジャーナリトに育ってくれるだろう。

象のラベルが印象的な“タスカー”である。ケニアに限らず、アフリカの人達はわが同朋以上にビールを好物とし、ビールの値上げが政情不安や暴動につながるとさえいわれている。そのためかビールの値段もえらく安く（わが日本国が高すぎるのか）、このタスカー500ミリリットルびん入り1本80円ほどである。それも高級ホテルのバーで飲もうが屋台のキオスクで飲もうが同じ値段であるのはうれしい。もちろんナイロビでは外国人には冷えたビールが出てくる。アフリカの人達は、冷えたビールにはこだわらないようで、むしろ生ぬるいビールを好む趣がある。

ケニアのビールを満喫してタンザニアに入ったところ、その味の落差にはおそれいった。ケニアとタンザニアでは、社会体制のちがいがあり、物資の出まわりぐあいも極端にちがうのであるが、ビールの味のちがいはそれを象徴しているようだ。国境をこえただけでこれほどちがうのかとまずびっくりである。M氏の用意してくれた文献によると、タンザニアには5種類の銘柄があることになっている。しかし、お目にかかれたのは“サファリ”と“ピルスナー”の2種類だけで、それもびんにラベルはなく、王冠に銘があるだけで、どうみても同じ味しかない。それも思わずこれがビールかと、口にでてしまうような代物である。こりゃ馬のションベンじゃないかなどと悪口をたれていたが、仕方なく飲み続けたのであるから世話はない。

タンザニアの首都ダルエスサラームはインド洋に面しており、ナイロビに比べるととても暑く、熱帯のアフリカに来たという実感がする。暑い上に乾燥しているのでのども乾き、何か飲まずにはいられない。絞り立てのオレンジやパッションジュースもよいが、やはりビールに手が出てしまう。タンザニア人も男女をとわず朝からビールを飲んでいる光景がよくみられた。アフリカ人は日本人のようにビールをさしつさされつ

くみかわすなどということはやらない。各人がそれぞれ注文し、自分でコップについて飲むだけである。

ダルエスサラームではそれでもビールが入手できないという状況はなかった。ダルエスサラームからおおよそ1,200キロ離れたタンガニーカ湖畔の町キゴマでは必ずビールがあるという保証はどこにもないのである。まる2日2晩の汽車旅の後ようやくの思いでたどりついたキゴマのホテルのバーに入り、ビールだビールだと喚いてみても、ない袖は振れぬと、ノーのひと言で終り。どうしょうもないビールではあるが、ないとなると無性に欲しくなり、情ない思いをした。とにかく昼なかったものが夜にはでてきたり、2日あって3日なかったり、その出現には規則性はなく、存在を予測するのは困難である。どうやらこの国の貧弱なる輸送事情のなせるわざらしい。醸造工場のあるキリマンジャロ山麓の町アリューシャから悪路をトラック輸送で運ばれてくるようで、その割に値段がほんの少ししか高くないのは、それなりに国が力をそそいでいるためなのであろう。

## ライン河のほとり

工学部助教授 松木賢司

ジュリアス・シーザやポンペイウス等が活躍した今から2千年以上も昔、ローマ帝国が建設したことに始まる由緒ある諸都市がライン河沿いに点在している。コブレンツ、マインツ、ケルン等がそうである。私しが昭和65年10月から約10ヶ月間滞在したドイツ航空宇宙材料研究所は、このうちのケルン市の郊外にある。御存知のようにラインはヨーロッパの大河である。ケルン市近くでその河幅は約280 mとなり、数百トンもある数多くの石炭・石油の定期船やローレライの観光船が、ゆっくり往復している。河をのぼる船は止まっているかのように見えるが、それでもゆっくり近づく遠ざかる。川べりは遊歩道となっており、春から秋にかけて、そして又厳冬の寒風走り抜ける中でも散歩する人達の絶えることはない。ジージャン姿の若い人は多少足ばやに、またドレスアップした中年のカップルや老夫婦は背すじをしゃんと伸ばし、手をつないで！ゆっくりと歩いてゆく。

西ドイツの日常生活を体験してまず驚かされたのは、勤務時間が短かく休日の多いことであった。研究所は完全な週休2日制で1週40時間勤務すれば良い。フレ

そのようなわけで、ある時には何をさておいても飲んでおくという習慣が身についた。ホテルのバーにあるビール用の冷蔵庫はごく小さく、たちまち冷えたものはなくなる。そこでやむなく生ぬるいのを飲むことになるが、いつしかこれにも慣れてしまった。ヒトの適応力の大きさを再認識した思いである。しかし、2本ならよいが3本飲むと必ず腹具合がおかしくなったのには、いささかまいった。

さて、調査地のマラガラシ河の付近には冷蔵庫どころかビールもなく、またあてにしていた缶ビールもキゴマでは入手できないということで、ついにビールなしの日を送るはめに陥った。日本から持参した冷媒は、缶ジュース用となり、それでも調査員一同感謝しつつ利用させて貰ったのである。

以上のような次第で、いろいろ苦労はあったが、病気になることもなく帰国することができた。それから3月、アフリカでの出来事は夢か幻か定かでなくなりつつあるが、かたづけなければならない採集物が現実であった証として残っている。

キシブル制なので、朝7時に出勤した人は午後4時帰宅する。4月から9月まで夏時間を採用しているので、実際にはこの間は朝6時出勤し午後3時帰宅ということになる。毎日が土曜日みたいなものである。緑濃い森へ行けば小島がさえざり犬が走り、家族連れがゆうゆうと夕方の散歩を楽しんでいる。ドイツの人は本当に散歩が好きである。もちろんジョギングや森の中にある広場でサッカーを楽しむ人達も見かける。夏は午後10時頃でも明るいから、時間はたっぷりある。一般に夕食はパンとコーヒーやサラダ等ですませるから、一家の主婦にも十分なゆとりがある。又町へ出れば旧市街は歩行者天国となっており、レストランやカフェテラスの店頭ではテーブルを囲みたくさんの人々がビールを飲みながら歓談する。日本では勤務時間が1日のほとんどすべてのように思えるが、西ドイツでは1日の第2部に本当の生活があるように感じられた。

もちろん年間を通して祝祭日があり、さらに6週間の年次休暇がある。2年分の休暇をまとめて使い、シベリヤ鉄道経由で日本へ行きたい。については、ナホトカから日本への船便について調べて欲しいと頼まれ

たこともあった。その優雅な生活振りが大いにうらやましい。これでいいのかと考えさせられもするが。

しかし冬は長くて厳しい。真冬には午前9時過ぎようやく明るくなり午後4時頃はもう暗くなるので、暗い中に出勤し帰宅することになる。ケルン周辺の雪はせいぜい10cm程だが、気温は零下20℃以下に冷えることもあり、まるで冷凍庫の中のようなことになる。

西ドイツでは昼食がメインで、ボリュームのある暖かい料理をお昼に食べる。学校は午前で終了する。

以前は大人も勤務先から一時帰宅して、家族そろって食事をしたそうである。暗くて寒い冬の一日には、肉体的にも精神的にも、その途中でエネルギー補給の必要があるからであろう。このような体験をしてみると、勤務時間が短かく休暇が長いのは、厳しい冬を乗り切り明るい太陽を求めるのに必要な生活システムなのだろうと理解された。そして、その程度の勤務時間でも今の所は充分生活してゆける、豊かで効率的な国ということであろうか。

しかし、MBB社という航空機製造メーカーを見学した時、私にとっては思いがけない話を聞かされた。その工場を案内してくれた主任研究員が、日本人は良く働くので、その科学技術開発のスピードは西ドイツにとって脅威であると言う。人工衛星製造部門でもすぐ追い抜かれるだろうと。それで私が、この国には休暇

が多過ぎるのではと疑問を述べたところ、個人的には休日返上で研究したいこともあるが、制度上それを出来ないと言う。現在の西ドイツの失業率は10%以上もあるので、多くの人に少しでも仕事がゆきわたるようにみんなが定められた休暇を必ずとる義務があるというのが理由である。すべての立場の人が賛成しているわけではなかろうが、2人分の仕事を3人で分ける考え方で、日本とは逆の傾向である。或る主婦からパートタイムについて、他の誰かが残りの半日分を働くことが出来るように、自分は半日だけで我慢していると真面目に語られたこともある。研究所でも仕事の役割分担はしっかりしており、許可なく人の仕事や装置に手を出すことはむづかしい。他人の仕事を奪うことになるからである。私のわずかな体験にもとづくものではあるが、西ドイツでは過酷な競争原理よりはむしろお互いの節度によって、ゆとりある生活の実現と維持のため努力しているとの印象をうけた。

“光陰矢の如し”という言葉を日本ではよく聞かすが、西ドイツではライン川の流れのようにゆったりと時が流れているかのように感じられる。生活のテンポと価値感の異なる日本と西ドイツの10年後は、はたしてどうなっているのだろうか？ 今から楽しみなことである。

## 『中国よもやま話』

工学部助教授 米田政明

昨年の秋2か月間、機会を得て中国へ行ってきた。本学は遼寧大学と4年前に学術友好協定を結び、以来教官の交流派遣を行っている。昨年は小生が派遣された。以下は小生が見た中国の印象である。

\*\*遼寧大学について\*\*

遼寧大学は中国東北地方遼寧省の省都瀋陽市にある。15の系から成り、学生数7,000、教職員数2,100程の規模である。小生は新設されて3年目の計算機系で主に人工知能の研究と教育について学術交流を行った。設備は十分と言えないが、教官は若手が多く活気が感じられた。また、学生相手に何回か講義したが、受講態度は真面目で好奇心と意欲に満ちていた。全寮制で8畳程の部屋に4人が寝泊りしている(大学の寮に限らず一般に中国の住宅事情は良くない)。寮には寝に戻るだけで、教室が講義を受ける場であり生活の場で

もある。夜10時頃までほとんどの教室の灯りがついていて、予習復習や読書等をしている。トランプに興じている者もいるが概してよく勉強する。朝は早い者で5時、遅い者でも6時に起床してジョギングや体操をする。生活は極めて規則正しく7時朝食、12時昼食、17時半夕食を守っているようだ。よくスポーツ(サッカー、バレー、バスケット等)をするせいか、あるいは間食をしないせいか、油っこい食事にもかかわらず肥満は皆無に近い。このことは学生に限らず中国人一般に言える。小生も規則正しく食事をとり(そうしないと食いはぐれるので生きるためには仕方なかった)、間食を断ち(したくても菓子の類が無い)、またよく歩いた(車が無いから当然)お蔭で滞在中体調が良く体重も落ちた。ただ残念なことに、帰国してからの反動は予想以上のものがあつた。

＊＊中国の人について＊＊

中国人は親切である。中国人同士では必ずしもそうでないらしいが、外国人に対しては一般に親切であると言える。遼寧大学滞在中に生活面で世話になった外事処の職員も専家楼（外国人教師用宿泊施設で各大学とも同様の施設を持っている）や食堂の職員も大変親切であった。中国人はまた好奇心が強くプライドが高い。バスの中や商店で日本語や英語で話していると寄って来てじっと聞いている。外国人に対して気後れすることは無いようだ。日本語や英語を学習している人は積極的に話しかけてくる。因みに大学では第1外国語が英語、第2外国語が日本語である。会話能力は本学の学生より数段上と感じた。また、米国や日本への留学希望も大変強い

＊＊埃と先端技術について＊＊

遼寧大学のある瀋陽市は埃っぽい。もともと土の粒子が細かいことや雨が少ないことなどがその理由であろうが、石炭を主燃料にしていることも大きい。瀋陽は工業都市だから工場が多く、また人口も多い。特に冬は各家庭の暖房も加わって埃や煤煙によるスモッグが多発する。一日街に出ると鼻が真黒になる。東京や大阪もひどいが瀋陽のはすごい。そしてもっとすごいのはそれに慣れ切っている（ように見えた）中国人の習慣である。日本でも薪や石炭を焚き、馬車が走り、舗装道路も教える程しかなかった頃はやはり埃っぽかった。中国がいま国をあげて目指している近代化に成功し先端技術が本当の意味で定着するのは、街から埃が姿を消し、埃を嫌う習慣が人々の身について後のことであろうと思う。

＊＊交通事情について＊＊

中国の道路は一般に幅が広く歩道もついているが、人と自転車と車の洪水である。いわゆるマイカーは無いのだが、バス、トロリーバス、トラックが多く、また各官庁や公司（会社に相当する）の乗用車やタクシーもかなり走っているので路上はニアミスの連続。優先順位は大きいもの順である。自動車の運転技術は神業的であり自転車の方も相当にうまいが事故も多いらしい。警察官が交通整理をしていない交差点では誰も信号など見ていないように見えた。旅行者保険に入るのでうっかり忘れていたのだが、恐くなって慌てて入ったものだ。市街の道路は街灯が整備されているが、それにしても自動車が夜間スモールだけで走っているのには驚いた。聞けば対向車のヘッドライトが眩しい

かららしい。自転車にライトがついていないのは言うまでもない。

＊＊一人っ子政策＊＊

人が道路に溢れていると書いたが、中国の最大の印象はやはり人が多いことである。「人山人海」という言葉があるが、日曜日の繁華街や平日のラッシュ時はまさにそれ。人がバス停に湧き出したかのように集まってくる。近代化の最大のネックも人口が多過ぎること、8年前から中国は一人っ子政策をとっている。さすが社会主義の国だけあって中国の社会福祉は徹底している。家賃や光熱水道料、バス代などの公共料金が驚く程安い上に、学費は大学に至るまですべて無料で老人には停年になったときの月給が年金として保証される。働いている年代が就労前と就労後の年代を、我が子彼の親の別なく、完全に支えていると言える。だから今後の人口構成を考えたとき、中国は一大ピンチを迎えるであろうが、それを乗り切れば近代化は急速に達成されよう。その時は世界中がmade in Chinaで埋まることも予想される。中国は地球上の四分の一の人間を使った壮大な実験をしているという見方もあるが、古来日本が多くを学んできた重要な隣国であることに変わりはない。

＊＊カルチャー・ショック＊＊

中国人民が一丸となった近代化に当たっているのを見て帰国した途端、小生はカルチャー・ショックを受けた。街のネオン、特に電力の無駄使いとしか言いようのないパチンコ店の装飾照明がやたら目についた。家では6才の娘がスケバン・デカをどうしても見るのだと言ってテレビの前で頑張っている。娯楽や息抜きは必要だ。しかし、中国では麻雀が禁止され、酒は飲むが酒に飲まれることは恥とされ（よって滞在中酔漢は一人も見なかった）ていることを思ったとき、日本の将来は大丈夫かなという気がしたのである。画一化は望むところではないが、今の日本の風俗・文化は軽くて歴史の重みに耐えられるようなものとは考えられない。世界中made in Chinaが出回り始めたとき日本は一步先にいたい、いなければならないと日本人として思うからである。

最後になったが、訪中の機会を与えて下さった本学大井学長・本田学生部長はじめ関係各位に謝意を表したい。また、渡航費を援助して下さいました田村科学技術振興財団に多謝。

## 四か月の日本（富山）体験

外国人留学生（経済学部）

鄭 歆 力（中国）

昭和61年10月8日、私の乗っていた飛行機が日本海を渡った時、機内の人々は皆立ち上がって、窓から日本を見ようとしていた。最初に見えたのは富山だと後にいた日本の方の叫び声で分った。一時間ほどで、やっと成田空港に着いた。東京で一泊して、翌朝、東京にこんなに遠い富山は一体どんな町なのかと不安に思いながら、富山に来た。10月の真赤の紅葉、冠雪の立山連峰、それぞれ表情の違う五百羅漢、長い歴史を持っている漢方薬作りで有名な広貫堂、また世界でも有名なYKK工場、全部コンピューターで制御されている下水処理センター等。こういう自然も、歴史も、近代性もある富山に強く心を打たれた。

私の出身地の北京は人口が919万人で、面積は10807㎞もあり、近代的な容貌を示しながらも、沢山の名所旧蹟と文化財を残している。中でも有名なのは明・清両代の皇宮であった故宮、明・清の皇帝が天を祭り、一年の豊作を祈る場所であった天壇・清の西太後の避暑離宮として作られた 和園、明代の13人の皇帝の陵、東西6000余㎞も延びる長城・その一部である八達嶺など数えきれないほどある。しかし、北京は気候が乾燥で、町は車や、自転車や、人であふれている。富山のような自然豊かで、静かな町にしていると、気が休まるように思われる。

つい先日から、富山では北陸らしい雪が降り始めた。今年は雪が少ないほうだとよく言われているが、私はあんな激しい雪の降り方にびっくりさせられた。しかし、雪景色は秋の紅葉景色とは別雰囲気である。私は毎日美しい雪つりを観賞しながら、学校に通っている。晴れる日に雪景色の写真も取って国に送った。雪で心配しているより、楽しみが多いのである。きびしい冬が過ぎたら、春を迎えるが、今から万物が生きかえる春を楽しみにしている。

ところで、私が富山大学に来る前に、経済学部の学務係の方々はすでに研究室と学生寮の世話をしてくれたし、来てからもいろいろと面倒を見てくれた。おかげで生活の不自由などほとんど感じないで、京てから、すぐ慣れてきた。しかし、私の指導教官でいらっしゃる武井勲先生のお宅で、初めて刺身のごちそうになった時、本当に生の魚の食べ方には慣れていなかった。

でも、「郷にいつては、郷に従え」と思い、今では刺身のおいしさも味わえるようになってきた。

さて、私の専門は日本語と日本文学であって、卒業してから北京市経済管理幹部学院に日本語の先生という仕事をしていた。今回、言語を導具として、日本経済を研修するために日本に来た。研修期間は一年間になっているが、経済学部の武井勲先生について、リスク理論とリスク・マネジメント理論という経営学の諸分野とその応用を勉強している。そのほかにも、いくつかの授業を聞いているが、経営管理方面の知識を勉強して、国に帰ったら、日本の経営管理理論の紹介に少しでも役に立てば幸いだと思う。いい先生と富山大学のいい環境に恵まれて、自分で努力しさえすれば、その夢は現実になれると確信している。

日本に来て、日本のいいところばかり見ているわけでもない。昨年、高岡で一つのおもしろい映画を見た。それは「人間の街」という日本の部落民の先活を反映する映画だった。部落民は顔も、服装もほかの日本人とまったく違いはないが、生まれるところから軽蔑されている。法律では差別されていないが、そういう出身の人だと会社がわかると、採用されなくなってしまう。そのための、部落民は屠場のような「下品」な仕事しかさせられない。普通の人とはもし部落民と結婚したら、まわりの人に反対されるし、家族とは見做されなくなってしまうほどである。私はその映画を見て、部落の人達と話し合っていたが、今の時代になっても、人為的に人を差別することは理解できない。自由な社会にも不自由な人がいるのではないかと思っている。部落民達は自分の権力を求めるために、「部落解放基本法制定要求国民運動」をつくりひろげているが、私も一日も早く人間としての権力を彼らに与えてほしいと思う。

日本に来て、まだ四か月だし、日本での体験は何物かと聞かれていても、うまく答えられない。とりあえず、いままでお世話してくれた方々に感謝し、また、これから9か月間の貴重な時間を利用して、日本のいろんなことを知りたいと思う。どうか、みなさん、今後ともよろしくお願い致します。

# 昭和61年度公開講座を終えて

公開講座委員長 吉田 順作

昭和61年度富山大学公開講座は、全学的なものとして (1)健康・スポーツ教室 (2)現代史と現代の2つが企画・実施され、まづまづの成果を収めたように思う。以下簡単にこの経緯を振り返ってみよう。

## (1) 健康・スポーツ教室

教育学部の河野信弘先生がオーガナイザーで次の3コースを企画・実施していただいた。

### (a) ジョギングコース

講師 山地啓司(教育学部)

期間 9月19日～10月18日(10日間)

会場 グラウンド地

受講者 14名(10名)

### (b) バドミントンコース

講師 西川友之(教育学部) 福田明夫(教養部)

期間 9月24日～10月2日(7日間)

会場 第3体育館

受講者 14名(14名)

### (c) 硬式テニスコース

講師 山下三郎(教育学部) 北村潔和(教養部)

期間 12月24日～12月27日(4日間)

会場 第1体育館

対象者 婦人(初心者)

受講者 15名(14名)

( )内は7割以上の出席で修了証書を差し上げた人数であるが、この講座の受講者の出席率が極めて良好であることが分る。

## (2) 現代史と現代

私がオーガナイザーを勤めて企画・実施したもので

期間 9月19日～10月11日(10日間)

会場 工学部大講義室

カリキュラム

1 9/19(金) 18～20 風巻紀彦(理学部)

『無限を数える』

2 9/22(月) 18～20 釜谷武志(教養部)

『中国文化大革命前後の文学』

3 9/24(水) 18～20

高尾テルノ(保健管理センター)

『高齢化社会における諸問題・・・生活・・・』

4 9/26(金) 18～20 竹川慎吾(経済学部)

『現代労働市場の諸問題・高齢化の進展と女子労働者の増大』

5 9/29(月) 18～20 安田祐介(理学部)

『エントロピーの世界観』

6 10/1(水) 18～20 三日市政司(工学部)

『マルコーニから放送衛星まで』

7 10/3(金) 18～20 宗孝文(教育学部)

『現代の教育－教育改革の方向－』

8 10/6(月) 18～20 川本栄一郎(人文学部)

『富山県方言の分布と歴史－東西両方言の接触地帯における－』

9 10/8(水) 18～20 角森正雄(経済学部)

『現代社会と裁判』

10 10/11(土) 14～16 塚島寛(工学部)

『石炭液化技術の動向』

受講者 38名(25名)

私がオーガナイザーをつとめた公開講座は、これが4回目のものであるが、受講者も大分雰囲気慣れてきたようで、どの講師の講演でも質疑討論が活ぱつであった。年令層は40代以上の熟年層の方が多いが、20代30代の方も数名おられ、この企画の将来性について自信が持てたものである。

全学的な公開講座は以上の2件であるが、教育学部が下記の公開講座を実施した。

講座名 マイクロコンピュータの教育利用

－教育的ソフトウェアを考える－

講師 山西潤一(教育学部)

期間 7月29日～7月31日(3日間)

会場 教育実践研究指導センター(教育学部附属)

対象者 小・中学校の現職教諭

受講者 42名(42名)

総括すれば、以上3つの公開講座の受講参加者を合計して123名、7割以上の聴講率で修了証書を発行したのが計105名、まづは盛会裡に61年度の公開講座も終える事が出来たと喜んでいる次第である。

# 構内駐車許可証について

昭和61年5月1日より駐車許可証をカード式として実施しているところですが、許可証の有効期限は発行年度限りであるため継続される方は3月31日まで所属学部(部)の担当係まで申し出て交付を受けて下さい。  
(駐車許可証(学生用)様式)

|                                                                                   |                          |                                     |                      |
|-----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|-------------------------------------|----------------------|
|  |                          | 許可番号 <input type="text" value="-"/> |                      |
| 富 山 大 学<br>駐 車 許 可 書<br>有効期限 昭和 年 月 日まで                                           |                          |                                     |                      |
| 車両登録<br>番号                                                                        | <input type="text"/>     | 氏 名                                 | <input type="text"/> |
| 連絡先                                                                               | TEL <input type="text"/> | 所属等                                 | <input type="text"/> |

(注) 規格B6判

(裏面)

## 注 意 事 項

1. 本許可証は、大学構内に駐車する際、運転席前面の位置で外部から識別できるよう表示すること。
2. 駐車禁止区域内では駐車しないこと。
3. 本許可証は、他人に貸したり譲ったり絶対しないこと。
4. 構内の道路標識及び標示に従い安全運転に努めること。
5. 有効期限が経過したとき、卒業、退学等により学籍をはなれたとき、又は車を使用しなくなったときは、直ちに駐車許可証を発行者に返還すること。
6. 記載事項に変更のあるときは、発行者に届け出ること。
7. 駐車中に盗難あるいは事故等により損害が生じても、大学は一切その責任は負いません。

富 山 大 学

## ◆◆◆ 学 部 だ よ り ◆◆◆

### ◆ 教育学部

## 教育実習について

附属小学校教諭・実習主任  
国 永 正 紀

「教育実習の前と後では、あなたの教師になる自信は深まりましたか」という問いに対する学生の回答は、前にくらべて自信が深まった。..20人(30.8%)  
イ、前にくらべて変わりはない。.....19人(29.2%)  
ウ、前にくらべて自信がなくなった。13人(20.0%)  
エ、わからない。.....13人(20.0%)  
という結果であった(昭和61年度教育実習、4年次生回答者65名)。

この結果について、教育実習を修了したというのに、自信を深めた学生がわずか3割程度とは情けないと思われる人もあるだろう。しかも、自信がなくなった学生やわからないで迷っている学生が4割もいるから、果たして実習の成果があったのだろうかという疑問をもたれる人もあるだろう。

しかし、私は、教育に対する理解の深まりと、その教育を仕事とする教師の責任の重大さを、実習という現場での体験を通して深く認識したためであると解釈してみたい。

学生に「今度の教育実習で、印象に残ったことは何ですか」と、10個の選択肢から2つ選ばせた。そのベスト3は、

- 1位：教えることのむずかしさ ..... 23人(50.8%)
- 2位：教材研究のむずかしさ ..... 29人(44.6%)
- 3位：教師の仕事の大変さ ..... 22人(33.8%)

であった。

教師としての、教えることのむずかしさや仕事の大変さを体験したからこそ、最初の問いに対して厳しい自己評価をしたのではないかと思うのである。もし、

「教育実習の前と後では、あなたの教師になりたいという気持ちは深まりましたか」と、ちょっと表現をわからなくすれば、たぶんもう少し肯定的な回答が多くなると思うのである。

この解釈を裏付けるものとして、もう一つ次のようなデータがある。「実習での経験を残りの大学生活でどう生かしたいと思いますか」という問いに対しては、  
ア、知っていることと教えることは違うことを改めて感じたので、教材研究や子供の発達についてもっと勉強していきたい。…………… 43人(66.1%)  
イ、教えるほどには知り得ていないことを改めて感じたので、専門的な勉強をしっかりと身につけていきたい。…………… 18人(27.7%)  
ウ、その他 …………… 4人(6.1%)  
という回答がみられる。実習を修了してこれからの大学生活での生活を、教育学部に学ぶ者としての自覚をもって、新たな気持ちで取り組もうという学生が、9割以上もいるわけである。

彼等のほとんど(98.5%)は、実習をやったと言っている。そしてその理由として、子供と共に生活したことの楽しさと、その中での厳しさと責任、さらに自分の教職への適性がある程度わかったことなどを、多くの学生はあげている。

教育実習の目的は「学生が教育現場において教育を体験し、教育についての理解を一層深めることと、そのような教育に携わる教育者にふさわしい人間を形成すること」である。この目的からみれば、学生が単なる皮相的な感覚で教職志願を考えるのではなく、現場での体験にもとづいて厳しく教職志願を考えてくれることが望ましい。だから、今年実習を修了していった4年次生70名の学生の多くは、厳しく自己を認識して教師への道を歩み始めたという意味で、立派に教育実習の目的を達成したと考えられるのである。

実習を終えてのある学生の次のような感想は印象であった。

私は採用試験に失敗して実習にやってきた。気が重かった。しかし、子供たちの顔を見たときにその気持ちが晴れた。毎日子供と共に過ごしている中で、毎日が新しい発見の連続であることを体験した。

子供たちのすばらしさ、教えることのむずかしさ、そしてかわいい子供たちにうまく教えることのできないもどかしさなどを、同じクラスの先生の仲間で語り合った。担任の先生の毎日の御指導の様子に触れ、教師という職業の重さを感じることができたように思う。

私は、採用試験に何度失敗しても何度でも挑戦してみようと思う。そして教師になりたい。こんな強い願いを与えてくださった担任の先生や、子供たち、同僚に感謝します。ありがとうございました。

実習終了直後の感傷的な気持ちがあったにせよ、なんと純粋な感想であろうか。その純粋な気持ちをもち続けてほしいと願うとともに、来年は是非採用試験に合格されることを祈りたい。

私たちは毎日子供のことを考えて実践している。教育学部の学生を、学部教官と附属教官とで学生の身になって育ててやる必要がある。例えば、学生は(特に4年次生)大学での自分の指導教官が授業を見に来られることをとても喜ぶ。先生が自分たちのことを見守ってくれているという暖かい心を感じるのである。是非実習のときは授業を見て、一言でも声をかけてやっていただきたいと思う。また、以前ほど「大学で学んだことは役立たない」という学生が多くないのは、実習に関して学部と附属の間で試みてきた観察参加やオリエンテーション、講義などの成果が徐々に現れてきている結果ではないかと考えている。今後ますます連絡を密にして実習を推進していきたいと思う。

◆ 工 学 部

工 学 部 だ よ り

〔1〕 富山大学工学部において昭和61年11月以後に開催された学会あるいは講演会は、下記に示す4件である。いずれも各学会支部講演会であるが、多くの聴講者

が活発な研究活動を繰り広げておられ同慶の至りで、今後一層発展が望まれ、学生にも広く門戸を明けて聴講してもらい、将来の道に役立てて載きたい。

| 使用月日     | 学 会 名 簿                      | 使用人員  | 世 話 人          |
|----------|------------------------------|-------|----------------|
| 61.11. 6 | 日本機械学会北陸信越支部特別講演会            | 300名  | 熱工学<br>井村定久    |
| 11.21    | 電気学会北陸支部講演会                  | 70 "  | 通信工学<br>加川幸雄   |
| 12. 6    | 日本物理学会・応用物理学会北陸支部連合学術講演会及び絵会 | 180 " | 電子素子工学<br>女川博義 |
| 12.11    | 情報処理学会中部支部講演会                | 150 " | 応用電子工学<br>吉田順作 |



〔1〕 富山大学工学部では昭和60年9月をもって移転統合という20年来の悲願がかなえられました。

工学部同窓会ではこれを祝し、記念事業の数々を立案遂行してきましたが、記念事業のしめくりとしまして、今後の学生諸君に対して雄大な理想のもとに、気概をもって立ち向って載きたいという諸先輩の願いから、昭和61年8月に芸術院会員 故 昼間 弘氏の作品で、「雄気」という題の高さ2 m30cm、総工費約700万円の青年立像（写真）を発注し、昭和61年10月25日に完成致しました。

工学部同窓会はこれを記念し、10月27日に除幕式並びに大学当局への寄贈式を挙行致しました。

← 工学部中庭の『雄気』ブロンズ像

××××× 学 生 部 だ よ り ×××××

昭和61年度外国人留学生懇談会及び  
工場見学会の開催について

昨年11月21日に、本学に在学する外国人留学生・研究員のため懇談会と工場見学会が開催されました。

◎ 工場見学会

外国人留学生や研究員の人達は指導教官の斡旋で個々に工場見学を体験していると思いますが、大学の行事として行えば国際交流の面においても意義があろうとのことで全員による工場見学が初めて実施

されました。

当日は午後1時から、外国人留学生・研究員9名が学生部職員の引率により、富山市内の(株)広貫堂と武内プレス工業(株)の両工場を見学しました。

小春日和の好天の中、限られた短い時間ながら両社の温い配慮と世話役の方々の巧みな工場概要等の説明や丁寧な現場案内を受けた留学生達は、日本

の企業的一端を垣間みることができ満足の意を表わしていました。

#### ◎ 外国人留学生懇談会

工場見学会に続いて午後5時から、市内、高志会館において学長ほか大学関係者出席のもとに開催されました。

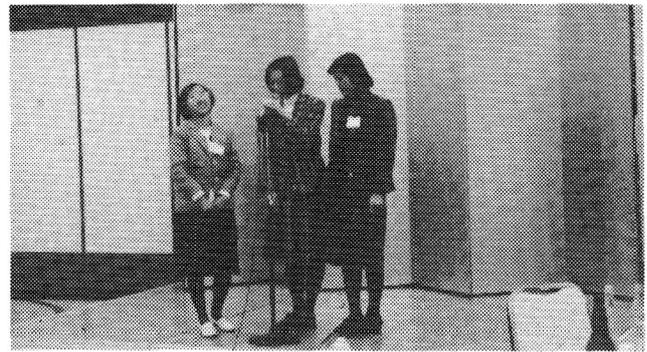
これは、日頃研究室にこもり勝ちな留学生達が一堂に会し、自由に意見交換することと、大学関係者と親睦を深めることを目的として年に一度開催される大学の行事です。

本学への留学生は徐々に増える傾向にありますが現在は、中国、韓国、ボリビア及びマレーシアの4か国からの10名です。学生課長の開会の辞に始まり、大井学長からは、遠く母国を離れ、不自由な生活に耐えて勉強している留学生の真摯な態度は賞讃に価する。健康に留意しそれぞれ所期の目的を達成し無事帰国されたいと温い励ましの言葉が贈られた。こ

れに対して、留学生代表から国際親善のため頑張るとの力強い挨拶があった。懇談では、修学上の問題や日常生活についての悩みが打明けられ、学長、学生部長から可能性のあるものから解決してゆきたいと述べられた。

続いて西村事務局長の乾杯の音頭によって懇親会が始められ、時が経つにつれ、あちらこちらで学部長、指導教官を交えての和やかな談笑風景に変わり、留学生の自己紹介も家族や母国の自慢や、中には得意の歌を披露するなど、まことに和気藹々とした雰囲気になっていました。

やがて予定の時刻となり、本田学生部長から、本学における国際交流推進の懸橋となっている留学生の存在意義は極めて大きく、今後の発展に貢献してほしいとの挨拶を最後に、大学関係者全員の温い拍手によって留学生一人一人を見送り、楽しい懇談会の幕が閉じられました。



#### ☒ 学生証の査証について

1・2・3年次生は、各学部の学務係（教養部においては学生係）で、昭和62年度の査証を行いますので必

ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

#### ☒ 在来生合宿研修について

在来生合宿研修は、スキーを取り入れ1月7日から13日までの1週間にわたり、120名の学生が参加し、11名の指導講師のもとに志賀高原ブナ平スキー場を中心に行われた。

富山を出発した時は全く雪がなく、ブナ平でも積雪

が少なく心配しましたが、参加者の心掛けがよかったせいかその後降雪にめぐまれ、充実した研修会となり多大の成果をあげ、無事終了することができました。

これもひとえに指導いただいた諸先生方並びに体育会の学生諸君のおかげと深く感謝いたします。

☒ 在来生合宿研修を終えて

実行委員長 岡村 洋

本年度在来生合宿研修は例年通り1月7日から13日までの6泊7日で行ないました。参加人数が一頃の九割程度でしたが、その分内容の濃いものになったと思います。今後さらに内容の充実に務め、在来生合宿研修を発展してゆく段階にあると思います。

本年度の研修は実技一本槍だった内容を見直し、イメージトレーニングを取り入れました。2回にわたり16mmフィルムを上映し、技術向上の手助けとなるようにしました。参加者はここでつかんだヒント、イメージを自分のものにしようと積極的に実技講習に取り組んでおり、今回初めて行なったイメージトレーニング成功に終わったと思います。

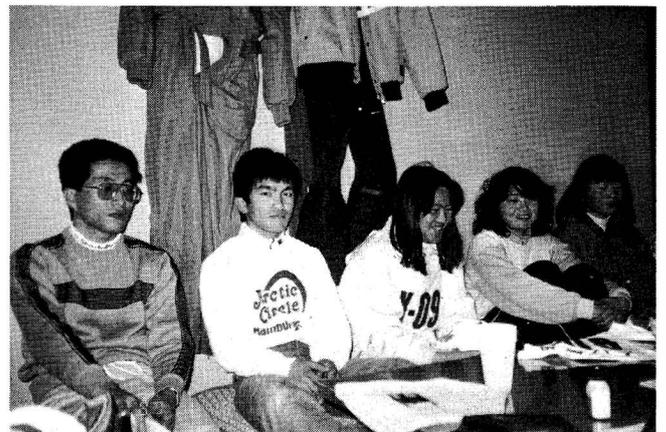
また昨年取り入れたビデオ撮りを今年も行ないました。実際に自分の姿を見ることは客観的に自分の欠点を見つめ直すことができ、たいへん有意義なことです。今年ビデオを見た後に指導教官を交じて討論をする班が増え、下級班ほど技術向上がめざましいものが見

られました。

本研修ならではの松明滑降が悪天候のために中止になりました。幻想的な松明の灯、ファイヤーを囲んでの歌声、全て印象深いものだけに非常に残念でした。研修後のアンケートの結果を見ても、印象深いものに多くの参加者が挙げており人気が高いので予備日を設けるなどして、来年度以降は中止にならないようにしてほしいと思います。

朝6時半の起床に始まり、夜10時の就寝までスケジュールがつまっており、かなりハードな研修でありましたが、学生間及び学生・教職員相互の親睦が深められ、自然に親しみ、スキーというスポーツを通して一層の人間形成が図られたことと思います。

最後になりましたが、本研修に際して、絶大な御協力を賜りました学生部並びに指導教官の方々に心から御礼申し上げます。



☆☆☆☆☆ 学園ニュース編集委員 ☆☆☆☆☆

|      |     |    |     |    |    |
|------|-----|----|-----|----|----|
| 学生部長 | 本田  | 弘  | 理学部 | 松本 | 賢一 |
| 人文学部 | 山口  | 幸祐 | "   | 広岡 | 公夫 |
| "    | 櫛木  | 謙周 | 工学部 | 多々 | 静夫 |
| 教育学部 | 佐々木 | 浩  | "   | 杉本 | 益規 |
| "    | 山本  | 都久 | 教養部 | 高山 | 安和 |
| 経済学部 | 大野  | 正道 | "   | 山本 | 孝一 |
| "    | 相澤  | 吉晴 |     |    |    |